

かみ しん じょう
上新庄チャンバチ遺跡

2020

石川県野々市市教育委員会

目 次

例言	
第1章 経緯と経過	
第1節 調査にいたる経緯	1頁
第2節 発掘調査の経過	1頁
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	2頁
第2節 歴史的環境	3頁
第3章 調査成果	
第1節 調査の方法	6頁
第2節 基本土層	6頁
第3節 造構と遺物	6頁
第4章 総括	
第1節 平安時代の様相について	29頁
第2節 新規に発見された古墳について	29頁
遺物観察表	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 調査区配置図	1頁
第2図 野々市市位置図	2頁
第3図 地質図	3頁
第4図 遺跡地図	4頁
第5図 1区 遺物実測図	6頁
第6図 1区・2区 平面図	7頁
第7図 2区 南壁断面図	8頁
第8図 S11 平面図・断面図	10頁
第9図 2区 遺物実測図1	11頁
第10図 2区 遺物実測図2	12頁
第11図 3区 平面図	14頁
第12図 3区 南壁・東壁・北壁断面図	15頁
第13図 SBI 平面図・立面図	17頁
第14図 3区 遺物実測図	18頁
第15図 4区・5区 平面図	19頁
第16図 SZ1・SD1 平面図	20頁
第17図 SZ1・SD1 断面図	21頁
第18図 4区・5区 遺物実測図	22頁
第19図 6区・7区 平面図	23頁
第20図 6区 西壁断面図	24頁
第21図 8区 平面図	25頁
第22図 8区 SZ2 平面図	26頁
第23図 8区 SZ2 断面図	27頁
第24図 8区 遺物実測図	28頁
第25図 御経塚シンデン古墳群分布図	31頁
第26図 横江古屋敷遺跡の展開	32頁
第27図 上新庄チャンバチ遺跡 平面図	

例　　言

- 1 本書は、上新庄チャンバチ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県野々市市新庄一丁目地内である。
- 3 調査原因は、都市計画道路四十万安養寺線外1路線整備事業である。
- 4 調査は、野々市市産業建設部都市計画課（当時）からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、社会资本整備総合交付金を受け野々市市が負担した。
- 6 現地調査の年度・期間・面積・担当者は以下のとおりである。
現地調査期間 平成28年5月16日～平成28年8月31日
平成29年5月15日～平成29年10月4日
- 現地調査面積 平成28年度：2,800m²、平成29年度：800m²
- 調査担当者 平成28年度：西村恵子（野々市市教育委員会文化課主事）
腰地孝大（野々市市教育委員会文化課主事）
平成29年度：腰地孝大
- 7 発掘調査報告書は腰地孝大が執筆した。また田村昌宏（文化課長）が校閲した。
- 8 発掘調査に当たり安中哲徳氏、林 大智氏（以上公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）の協力を得た。
- 9 現地調査の測量業務については、株式会社太陽測地社に委託した。
- 10 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (1)方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第VII系に準拠している。
 - (2)水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3)出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
 - (4)挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
 - (5)土層図・遺物観察表の色彩注記は、「新版標準土色帖」に掲った。
 - (6)遺構名称の略号は以下のとおりである。
堅穴住居：SI、掘立柱建物：SB、古墳：SZ、溝：SD、土坑：SK、小穴：P
- 11 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

第1章 経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

上新庄チャンバチ遺跡は、平成 26 年度に野々市市産業建設部都市計画課より依頼を受け実施した、都市計画道路四十万安養寺線外 1 路線整備事業に先立つ試掘調査によって新規に発見された遺跡である。遺跡名は地区名である上新庄と、小字名であるチャンバチをとって上新庄チャンバチ遺跡とした。平成 27 年度は事業を実施せず、平成 28 年度から 2 カ年にわたって現地調査を実施することとなった。

調査前は包蔵地の大半が水田及び畑であり、ごく一部が造成され駐車場及び資材置き場等となっていた。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成 28 年度及び 29 年度の 2 カ年にわたりて実施した。平成 28 年度は、4 月 28 日付教文 88 号で石川県教育委員会に土木工事等のための発掘通知を進達し、発掘調査が指示された。現地調査は 5 月 16 日に着手し、8 月 31 日に終了した。

現地調査では農道や用水を境界として東から 1 から 5 区を設定した。重機掘削の段階で 1 区及び 2 区は遺構が希薄であり、自然流路の痕跡を検出した。また、2 区北西隅で竪穴建物 1 棟を検出した他、3 区では掘立柱建物を検出した。5 区では方形に巡る溝を検出した。調査終了後は速やかに市産業建設部都市計画課に引き渡され、工事が着手された。

平成 29 年度は 5 月に遺跡北側の 6・7 区、9 月から 10 月に西側の 8 区の調査を実施した。4 月 27 日付教文 44 号で土木工事等のための発掘通知を石川県教育委員会へ進達した。現地調査は 5 月 15 日に開始した。

9 月から実施した 8 区の調査では、調査区北西隅で逆 L 字に屈曲する溝状の遺構を検出した。この溝状の遺構が埋蔵文化財包蔵地の範囲外に延びると想定されたため、石川県教育委員会と協議を行い 9 月 25 日付で遺跡の範囲を変更し、調査範囲を拡張した。現地調査は 10 月 4 日に終了した。

尚、調査と平行し、道路整備予定範囲のうち県道野々市鶴来線（鶴来街道）を挟んだ西側について、遺跡の広がりを確認する試掘調査を実施したが、遺構遺物共に確認できなかった。地山の標高が 8 区から急激に落ち込み自然流路が検出されたため、遺跡の範囲が西に延びることはないと判断した。

整理等作業は、平成 28 年度から平成 30 年度にかけて実施し、報告書作成作業は令和元年度に実施した。



第1図 調査区配置図 (縮尺1/2000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

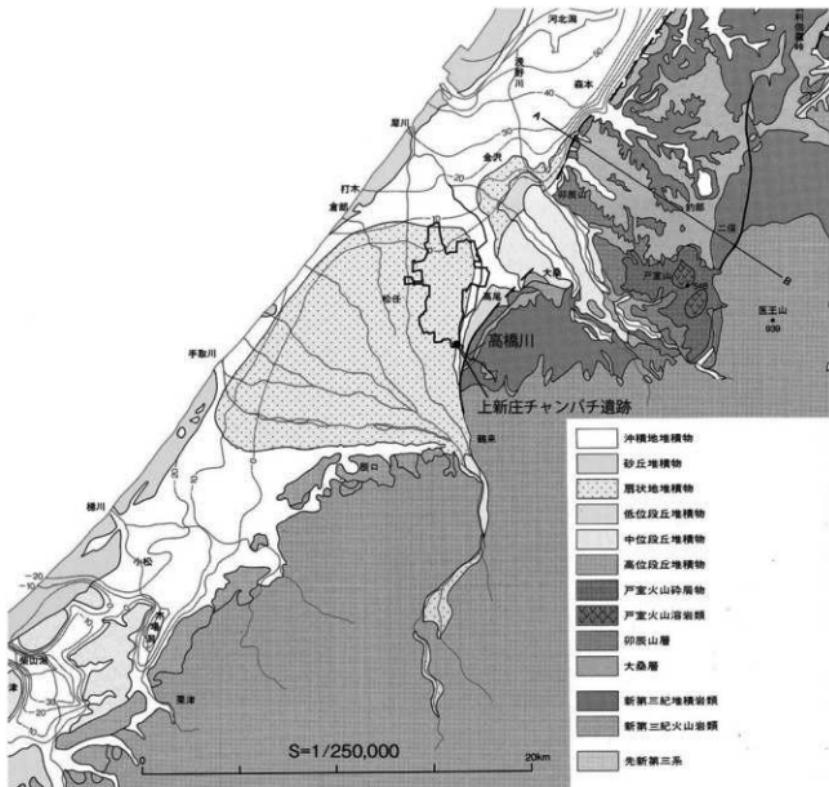
野々市市は石川県のはば中央に位置しており、金沢市と白山市に挟まれている。東西4.5km、南北6.7km、面積は13.56km²と面積は狭いものの、人口は令和元年10月時点で52,860人であり、年々増加している。

野々市市は、白山から流れる県下最大の河川である手取川によって形成された扇状地（手取扇状地）の扇央部から扇端部に位置している。標高は最高で49.6m、最も低い位置で8.4mと比較的平坦な地形である。手取川は幾度も流路を変えながら大量の礫を含む土砂を運搬しており、手取川から分岐する中小河川によって南北に延びる微高地が形成されている。

その中で、上新庄チャンバチ遺跡が位置している新庄地区は野々市市南東部に位置しており、南側を白山市、北東側は金沢市と接している。遺跡の東側を北流する高橋川は、富樫山地の裾野を北流し、犀川へと流入している。



第2図 野々市市位置図



第3図 地質図（絹野1993をもとに一部加工）

第2節 歴史的環境

本節では上新庄チャンバチ遺跡が位置する野々市市新庄地区を中心として歴史的環境を整理する。但し本遺跡では前方後方墳と方墳を各1基検出していることから、古墳時代の動向についてはやや地域を広げ、概観する。

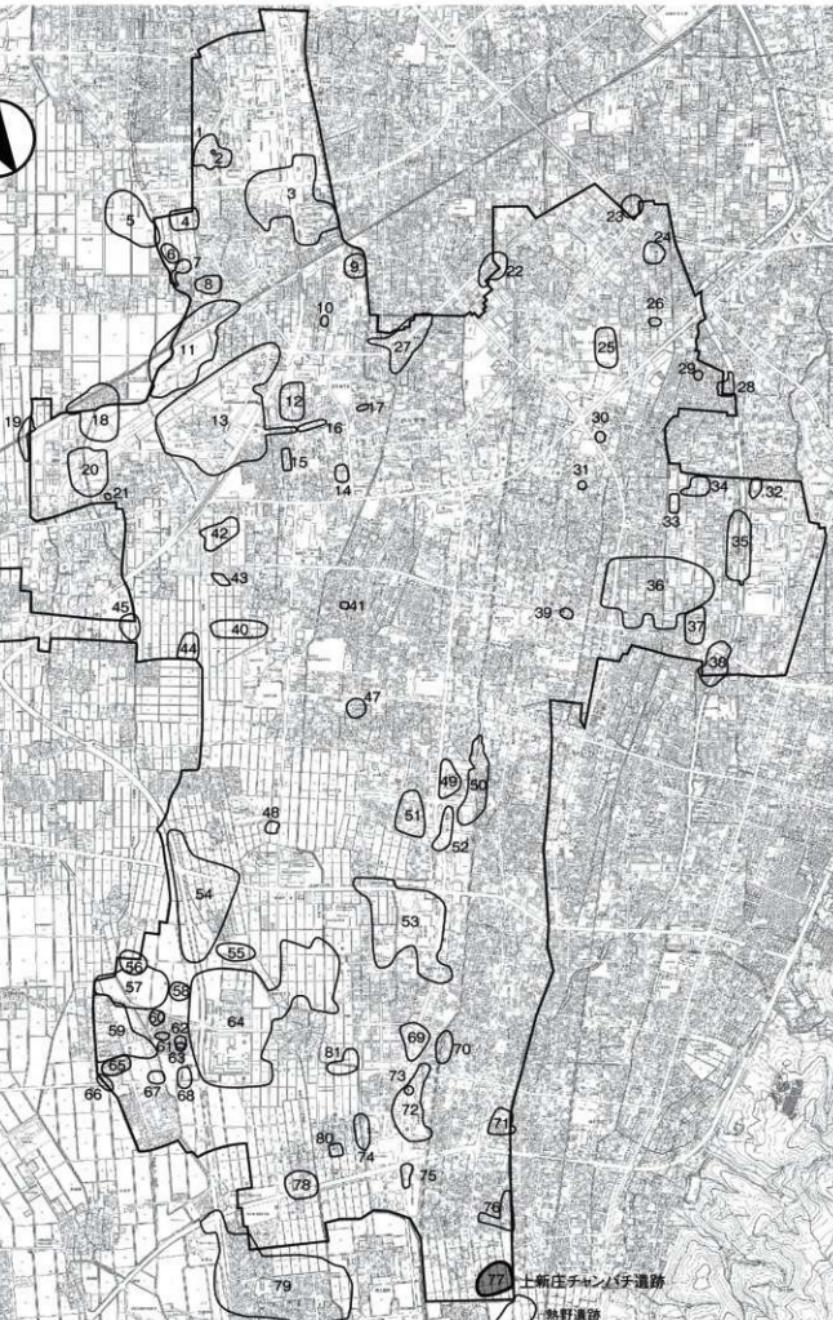
縄文時代から弥生時代における手取扇状地の開発は、地下水の自噴域である扇端部に集中しており、扇央部の開発は低調である。新庄地区周辺において最も早い時期の遺跡としては、縄文時代後晩期の遺物が確認されている下新庄アラチ遺跡(69)、上林新庄遺跡(72)などがあるが、これらの遺跡で当該期の遺構は検出されていない。

弥生時代においては、上新庄ニシウラ遺跡(75)で終末期の建物跡が検出されているが、存続時期が短期間であり、本格的な開発の痕跡は見出しがたい。その中で、上新庄チャンバチ遺跡の南東に接する白山市熱野遺跡では、弥生後期から古墳時代初頭にかけての集落が発見されており、近江系や東海系の特徴を持つ土器が出土している。また、本遺跡と同じく高橋川の流域で約5km下流に位置する横川・本町遺跡(28)では、弥生時代後期前半から終末期にかけての方形周溝墓が複数基検出されている。

古墳時代では、扇端部野々市市北部の御経塚シンデン遺跡(1)で前方後方墳4基、方墳11基が検出されている。時期は古墳時代前期前半に位置付けられており、弥生時代終末期頃の集落域から墓域へ変遷することがわかつている。また、御経塚シンデン遺跡の西方に位置する横江古屋敷遺跡(5)の白山市側でも古墳3基が検出されている。このほか、扇央部に位置する末松遺跡(64)においても、方墳の可能性のある方形に巡る溝2条が検出されており、時期は不明であるが扇央部においても古墳の築造が行われていたと考えられる。時期は下るが7世紀前半に位置付けられる上林古墳(73)や、白山市田地古墳などの終末期古墳が単独で存在している。

7世紀代に入ると、新たにそれまで遺跡が希薄であった新庄地区などの扇央部に集落が形成される。上林新庄遺跡や上林テラダ遺跡(74)などの上林新庄遺跡群や、末松遺跡などの末松遺跡群で7世紀前半から中葉頃に小規模な集落が出現し、7世紀第3四半期ごろの創建と考えられる末松庵寺跡(59、国史跡)などに象徴される手取扇状地扇央部の大規模な開発が進行したことがわかる。

8世紀代に入ると上新庄ニシウラ遺跡や下新庄アラチ遺跡、下新庄タナカダ遺跡(70)など集落が拡大し、とくに上林新庄遺跡では大型の掘立柱建物や門状遺構が検出され、鉄鉢などの仏教関連遺物が出土しているなど、在地の有力者が居住した拠点的集落と位置づけられている。これらの7世紀後半から8世紀代における急速な開発の背景には、近江や丹波など西方からの移民系集団が関与したことが指摘されている。また8世紀から9世紀では、栗田遺跡(53)で方形掘方の柱穴で構成される大型掘立柱建物が検出されているほか、下新庄アラチ遺跡や上林新庄遺跡、清金アガトウ遺跡(54)などで大規模な集落が維持されており、熱野遺跡でも平安時代の建物跡がみつかっているなど、集落形成が活発になる。



第4図 遺跡地図 (S=1/25000)

野々市市遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	性別	時代
1	御経塚シアン遺跡・御経塚シアン古墳群	御経塚	集落 古墳	縄文 弥生 古墳 中世
2	御経塚塙塚	御経塚		
3	御経塚遺跡	御経塚	集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
4	御経塚オノ遺跡	御経塚 長池	集落	弥生 中世
5	横江古屋敷遺跡	長池	散布地 集落 古墳	弥生 古墳 古代
6	長池カツジロ遺跡	長池	集落	弥生 古墳
7	長池ニシタクシ遺跡	長池	集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
8	長池キリハシ遺跡	長池	集落	縄文 弥生 中世 近世
9	野代遺跡	野代	散布地	縄文
10	野代オバヤシノ遺跡	野代 二日市町	散布地	
11	二日市シバヤチ遺跡	二日市町	集落 その他の墓	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
12	三日市カガシシノ遺跡	三日市町 楠町	集落	弥生 古代 中世
13	三日市山ノ遺跡	三日市町 二日市町	集落 その他の墓	縄文 弥生 古代 中世 近世
14	福井マツベエタ遺跡	福井	散布地	
15	福井シロ遺跡	福井	散布地	
16	福井シタキン遺跡	福井	集落	古代
17	福井ウカドリ遺跡	福井	集落	古代
18	越ヶ谷遺跡	郷町 御用町	集落	弥生 古代 中世 近世
19	善兵羅川遺跡	郷町	集落	縄文 古代
20	施用ケタゲ遺跡	御用町 郷町	集落	縄文 弥生 古代 中世
21	施用サニヤ遺跡	御用町	集落	
22	上宮寺跡	押野	社寺	中世
23	押野大塚古墳	押野	古墳	
24	押野大塚遺跡	押野	集落	縄文
25	押野タナカ遺跡・押野指跡	押野	集落 城館	縄文 弥生 中世
26	押野ウツワリ遺跡	押野	集落	弥生
27	押越ヨリカイイサカイ遺跡	押越	集落	弥生
28	横川本町遺跡	本町	集落	弥生 古墳 中世
29	本町ジワツガ遺跡	本町		
30	本町バハシマ遺跡	横浜町	散布地	
31	本町シガダ遺跡	本町	散布地	
32	高橋セガボ遺跡	高橋町	散布地 集落	縄文 弥生 古墳
33	山川船跡	高橋町 本町	散布地	縄文 中世
34	高橋ウバガ遺跡	高橋町	集落	弥生
35	扇が丘ゴヨウ遺跡	扇が丘 高橋町	散布地 集落	弥生 古代 中世
36	富岩船跡	住吉町 扇が丘	散布地 城館	縄文 古代 中世 近世
37	扇が丘ヤマガラ遺跡	扇が丘	散布地 集落	縄文 古代 中世
38	扇が丘ハマゴロ遺跡	扇が丘	散布地 集落	縄文 弥生 古代 中世
39	菅原キヤキモ遺跡	菅原町	集落	中世 近世
40	屋内船跡	屋内	散布地	縄文 中世 近世
41	太平寺イノメカ遺跡	太平寺	集落	古代
42	田尻ジンク遺跡	田尻町	集落 その他の墓	縄文 中世 近世
43	田尻サリクロ遺跡	田尻町	集落	弥生
44	蓮花寺カラゴロ遺跡	蓮花寺町	集落	古代
45	田中ノノ遺跡	蓮花寺町 郷町	集落	弥生 古墳
46	徳丸ジマウヤ遺跡	徳町	集落	弥生 古墳 古代 中世
47	三林船跡	下林	船跡	中世
48	下林パンジョウアケ遺跡	下林	集落	古代 中世
49	三納ヘイダジン遺跡	三納	集落	縄文 古代 中世
50	三納アヤミ遺跡	三納 矢作 菜田	集落	縄文 古代 中世
51	藤平田ナカシヨギジ遺跡	藤平田	集落	弥生 古代 中世
52	三納ニシヤ遺跡	三納 菜田	集落	縄文 弥生 中世 近世
53	栗田遺跡	栗田 齋平 中林	集落	縄文 古代 中世 近世
54	清金アガウ遺跡	清金 未松	散布地 集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世
55	未松佑造痕跡	清金	集落	古代 中世
56	未松福正寺遺跡・福正寺跡	未松	集落 社寺	古墳 中世
57	未松ダカシノ跡	未松	集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世
58	未松B跡	未松	集落	古代
59	未松塙寺跡	未松	散布地 集落 社寺	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
60	古元堂船跡	未松	城館	
61	未松C跡	未松	散布地	古代
62	未松古墳	未松	古墳	
63	未松船跡	未松	城館	中世
64	未松遺跡	未松 清金 中林	散布地 集落 その他の墓	縄文 弥生 古墳 古代 中世
65	大船船跡	未松	散布地	古代 中世
66	未松引神	未松	城館	
67	法福寺跡	未松	社寺	中世
68	未松シワん遺跡	未松	集落	古代 近世
69	下新庄アブナ遺跡	新庄 中林 上林	集落	古代
70	下新庄タカガ遺跡	新庄	集落	古代
71	下新庄フルナワフロ遺跡	新庄	散布地 集落	弥生 古代
72	上林新庄遺跡	上林 新庄	集落	古墳 古代
73	上林古墳	新庄	古墳	
74	上林テツガ遺跡	上林	集落	古代
75	上新庄ニニウカ遺跡	新庄 上林	集落	弥生 古墳
76	新庄カノキヤ遺跡	新庄	集落	古墳 中世
77	上新庄チャバチ遺跡	新庄	集落 古墳	弥生 古墳 古代
78	上林遺跡	上林	集落	弥生 古代
79	安典寺遺跡	上林	集落	弥生 古代
80	上林キアヅチ遺跡	上林	集落	
81	上林シガネ遺跡	上林	集落	古代

第3章 調査成果

第1節 調査の方法

調査区は農道や用水などを境に1区から8区に区分している。遺物包含層の掘削については、調査員が遺物を確認しつつ遺構検出面である地山の直上まで重機によって掘削したのち、人力により掘削した。重機掘削や検出作業時に出土した遺物の量はごくわずかであった。

第2節 基本土層

本遺跡の基本土層は、おむね手取川扇状地扇央部で一般的にみられる堆積状況に一致する。上層から、近現代の耕作土、耕作以前の表土があり、遺物包含層である暗褐色から黒褐色のシルト質の腐植土層、無遺物層である疊を部分的に多く含むにい黄褐色の砂質土となる。耕作土と腐植土層の間に部分的に近現代の流路の痕跡が認められる。

第3節 遺構と遺物

本節では調査区ごとに遺構と遺物の概要を述べる。なお、4区と5区及び6区と7区はそれぞれ記述する内容が重複するため、一括して述べる。また遺構は主なもののみを載せ、性格の不明な小穴などは記録を行っているものの掲載していない。遺物は主な遺構に伴うものを遺構ごとに述べる。

● 1区

第1項 概要

1区は平成28年度に調査した、最東端の調査区である。重機掘削を行った時点で、調査区の中央で幅5mほど東西方向に流れる自然流路を検出し、その南北に小穴を検出した。出土した遺物量も少なく、全体として遺跡が希薄である状況が確認できた。

第2項 遺構

検出した遺構は、小穴及び近世以降の自然流路である。小穴は小規模であり柱の痕跡を残すものは認められなかった。自然流路は調査区の中央を東西に流れおり、西側は2区に続いている。

第3項 遺物

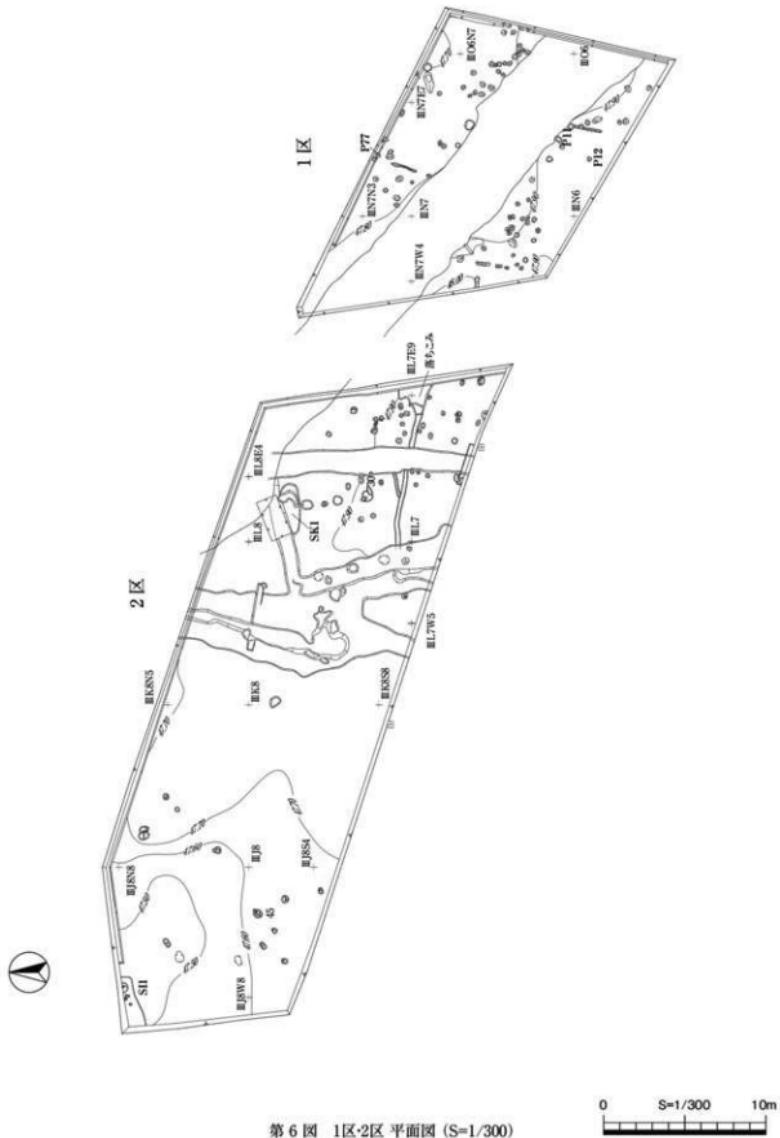
出土した遺物のうち、実測することができたものは縄文土器片1点(1)及び古墳時代初頭頃から古代の壺の口縁部2点(2・3)のみである。いずれも小穴の覆土から出土した。

第4項 小結

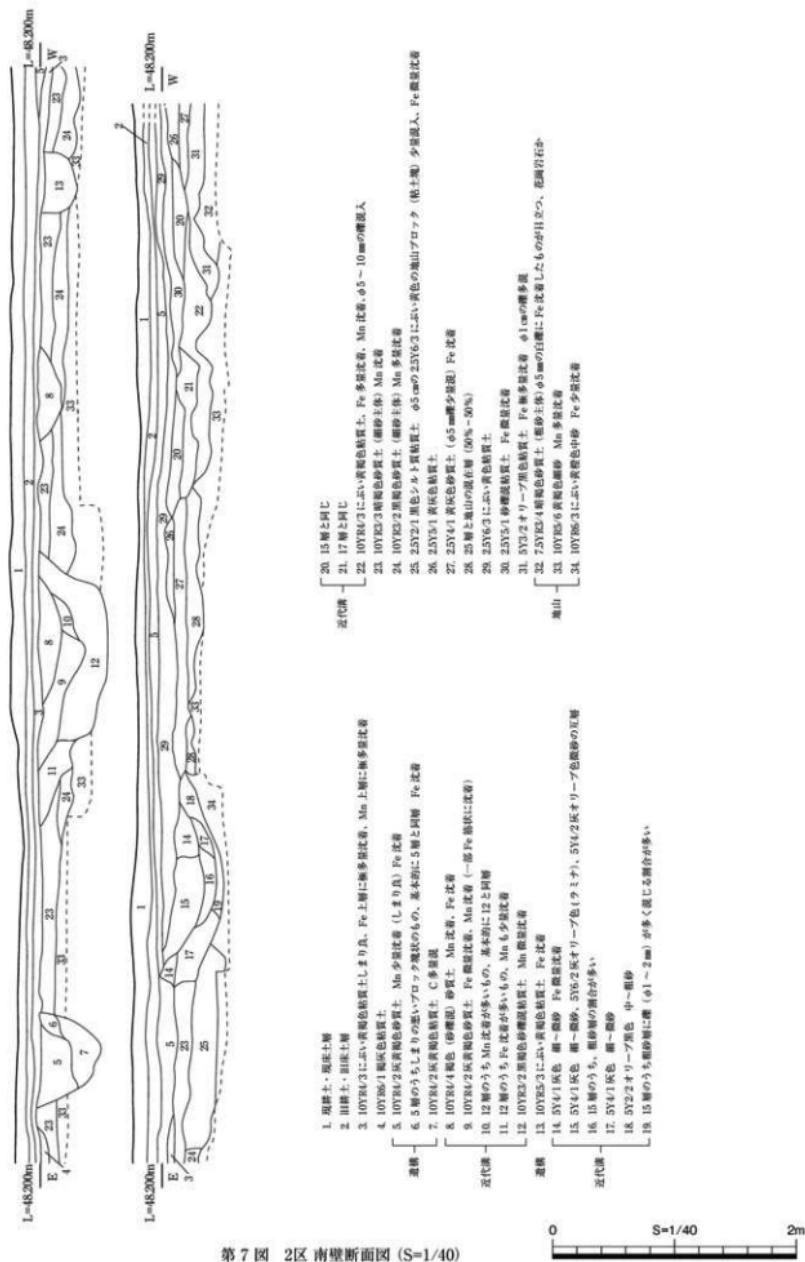
1区は遺跡の東端に位置しており、調査区の東側では高橋川が北流していることから、1区で検出した自然流路は高橋川の旧路であったと考えられる。大正4年に描かれた地籍図ではこの流路とほぼ一致する流路が記載されており、大正年間にはこの流路が存在していたと考えられる(『野々市町史』集落編)。



第5図 1区 遺物実測図 (S=1/3)



第6図 1区・2区 平面図 (S=1/300)



第7図 2区南壁断面図 (S=1/40)

● 2 区

第 1 項 概要

2 区は平成 28 年度に調査した。調査区の東側は近世以降の自然流路が複数状重なり合っており、縄文時代晚期から近世まで幅広い時期の遺物が出土している。概ね遺構密度は薄いが、調査区北西隅で竪穴建物 SI1 を検出した。

第 2 項 遺構

竪穴建物 SI1

(検出) 調査区北西隅で検出した。遺構の南東隅の一部を検出できたのみであり、不整形なプランであったが、覆土を掘削した結果、かまどの跡と考えられる焼土や遺物がまとまって出土したことから、竪穴建物と判断した。(規模・形状) やや不整形な方形と推定される。遺構の大半が調査区外へ続いているため全体の規模は不明である。検出した範囲で東西 3m、南北 1m を測る。検出面から床面までの深さは約 20cm である。(覆土) 調査区の北壁及び西壁で覆土を記録した。平面では明確な貼床は検出できなかったものの、土層断面中の 10 層が床面であったと考えられる。(構造) 柱穴や周溝は検出できなかった。かまどの痕と考えられる焼土は直径約 60cm の範囲で広がっている。(遺物) 第 9 図-4 から 8 が床面から出土している土器類である。4 はほぼ完形の須恵器坏で 9 世纪前半頃のものである。5 ~ 6・8 は壺である。7 は瓶の口縁部で、6 とともにかまと付近で出土した。(時期・性格) 時期は遺物から 9 世纪前半頃と考えられる。

遺物溜まり SK1

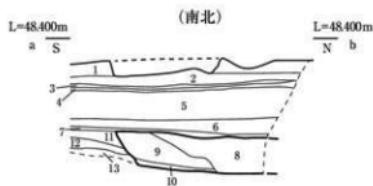
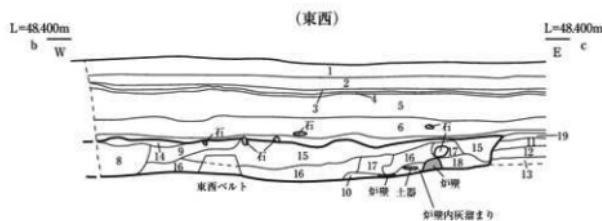
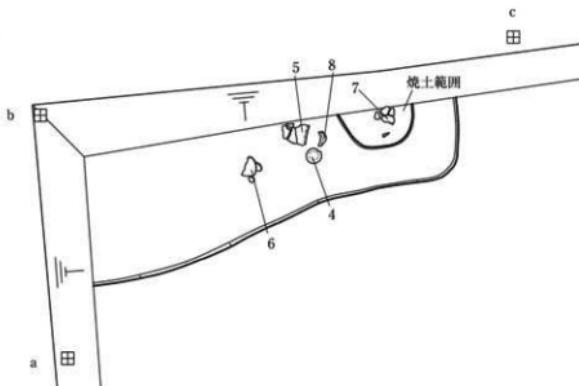
(検出) 2 区の中央を流れる自然流路の合間で検出した。人力による遺構検出の際に、流路に切られる黒褐色土の土坑状のプランを検出した。完形に近い高坏が押しつぶされた状態で出土していたことから、土器溜まりとして記録を行った。(規模・形状) プランの北側は自然流路によって削平されているため、形状は不明である。検出できた範囲では東西 3.2m、南北 1.2m の不整形な土坑状の遺構である。(覆土) 黒褐色のシルト質土が主体である。(遺物) 第 9 図-11 ~ 14 が出土した。13 は検出時に押しつぶされた状態で出土した高坏である。脚部は欠損するが、坏部はほぼ完形である。12 及び 14 は壺及び壺の口縁部である。(時期・性格) 土坑状の遺構であり性格は不明である。時期は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭頃と考えられる。

第 3 項 遺物

自然流路から出土した遺物は、縄文時代(15・16)、弥生時代終末期(17 ~ 20)、9 ~ 10 世纪頃(21 ~ 23)、及び近世の陶器片などがあり、また砥石や木製品なども出土している。

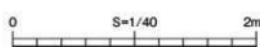
第 4 項 小結

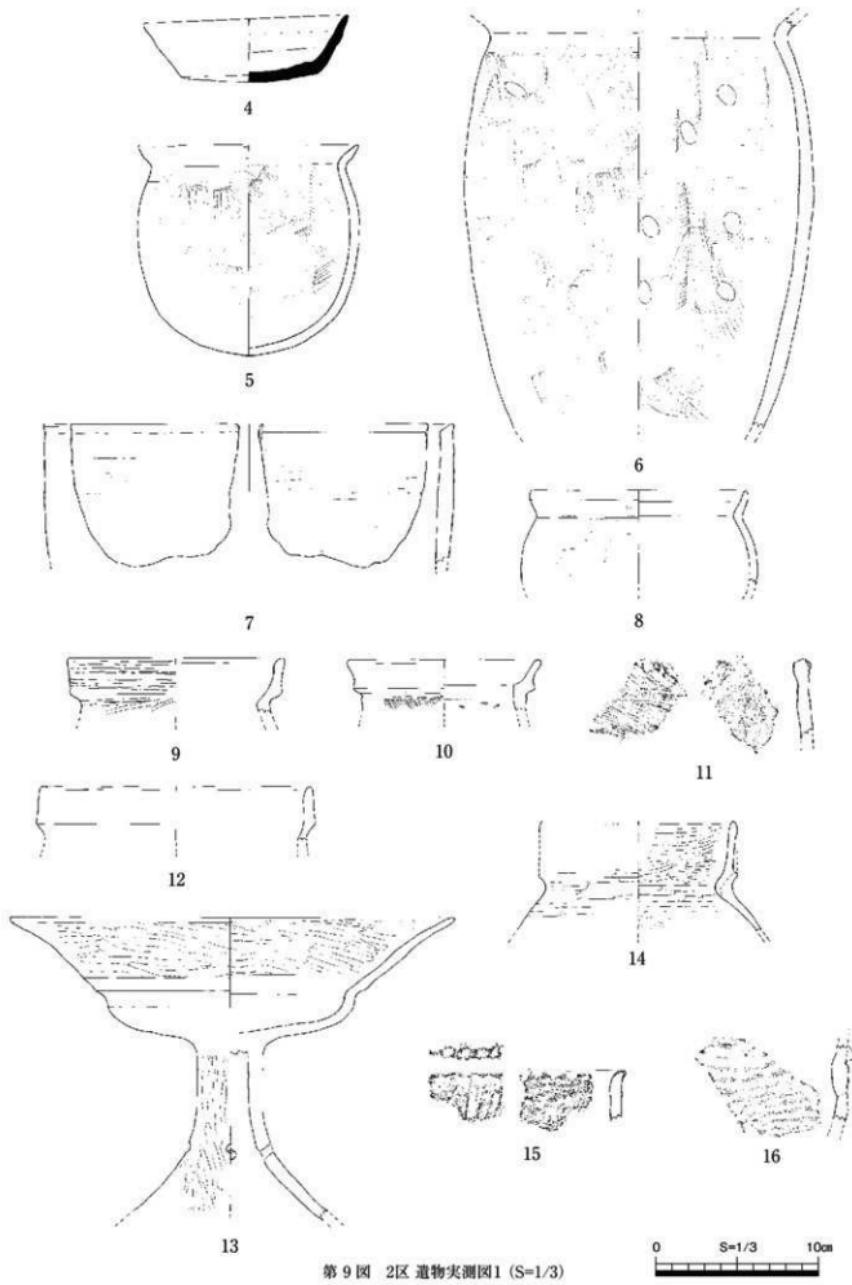
2 区では唯一の竪穴建物を検出した。この竪穴建物の他に同時期の遺構と認識しうるものは検出できていないが、近接する熱野遺跡では平安時代の建物跡が検出されており、熱野遺跡から続く古代の集落の縁辺部と評価することができる。



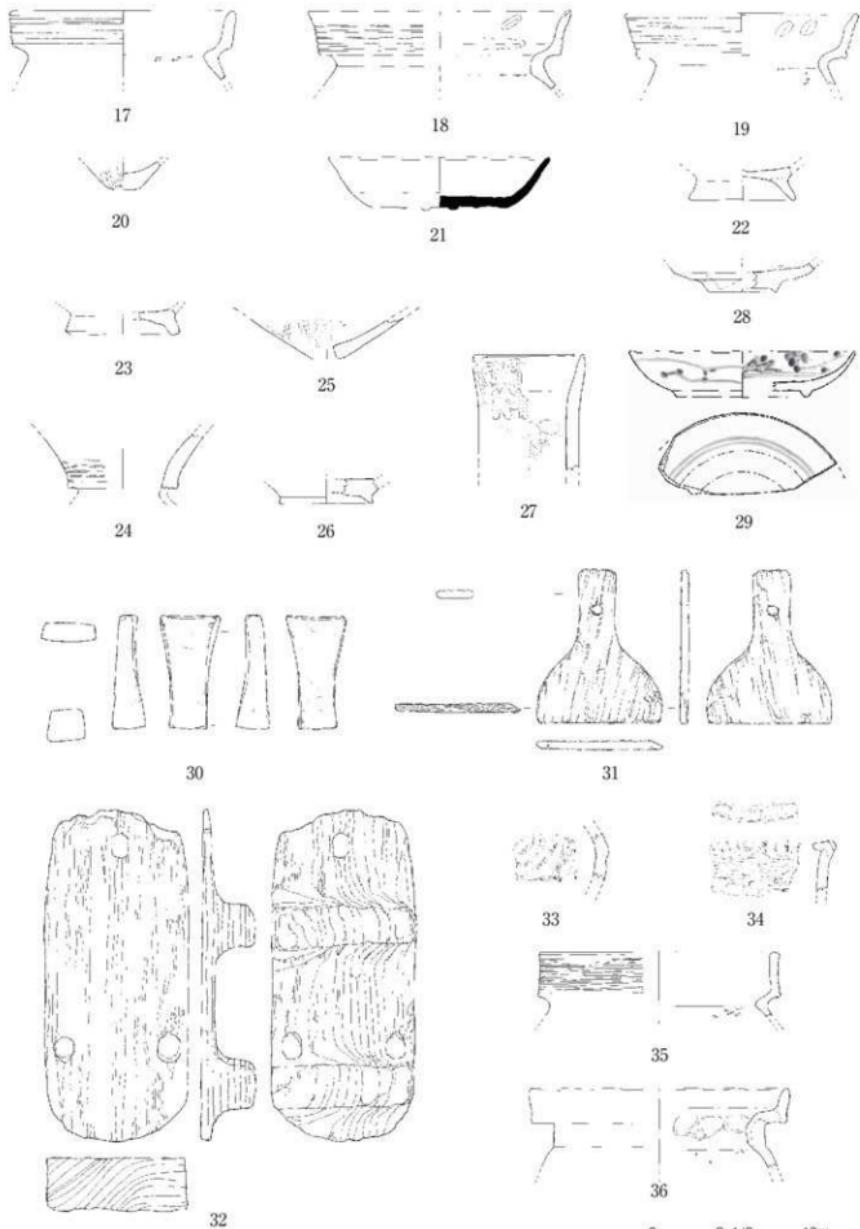
1. 25Y4/1 黄灰色粘質土 (塊状土)
 2. 25Y6/1 黄灰色粘質土 (塊状土)
 3. 10YR5/6 黄灰色粘質土 Fe 多量沈着 (床土)
 4 層の上に盛る鉄分層、3 と 4 は同層
 4. 10YR4/1 黄褐色粘質土 Mn 多量含む (床土)
 5. 10YR3/2 黑褐色砂質土 (混合層)
 6. 75YR2/2 黑褐色粘性砂質土 (混合層、地山ブロックが下部に集中して含まれる)
 7. 6 層の最底部に盛る Fe 沈着層
 8. 75YR2/2 黑褐色砂質土 (φ5 ~ 10 cm の地山ブロック中量含む)
 9. 75YR2/2 黑褐色粘質土 (φ1 ~ 2 cm の地山ブロック中量含む)
 10. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
 (細砂主体、地山土) と 11 層の混在層 (60% ~ 40%) 床の黏土か
- 混合層 2 []
 11. 10YR2/3 黑褐色砂質土 (φ3 cm の大粒混入)
 12. 11 層と 13 層の混在層 (50% ~ 50%, φ3 ~ 5 cm の大粒混入)
 13. 10YR5/6 黄褐色砂質土 (地山)
 14. 25Y3/2 黑褐色砂質土
 15. 10YR2/1 黑色粘質土に地山ブロックが φ2 cm 前後のブロックで混じる
 ブロックには Fe 沈着
 16. 10YR2/1 黑色粘質土
 17. 10YR4/4 黑褐色粘質土 (地山ブロックのようない)
 18. 16 層に φ3 cm の大粒が混じったもの
 鉄壁: 5YR4/4 にぶい赤褐色砂質土
 鉄内: 10YR4/2 黑褐色粘質土ペベタする
 (φ1 cm の鉄混じるが量は少ない)
 19. 11 層のやや明るいもの

第 8 図 SII 平面図・断面図 ($S=1/40$)





第9図 2区 遺物実測図1 (S=1/3)



第10図 2区 遺物実測図2 (S=1/3)

0 S=1/3 10cm

● 3 区

第 1 項 概要

平成 28 年度の調査範囲の中央に位置する最も広い調査区である。遺構は小穴を約 400 基検出したが、建物として組み合うものは調査区の北側で検出した SBI のみである。また調査区の南東側から北西方向に緩やかな谷筋を検出しており、北側に位置する 6 区に統一している。

第 2 項 遺構

検出した主な遺構は掘立柱建物 SBI のほか、風倒木痕と考えられる不整形な遺構 SX1・2、及び不整形な土坑状の遺構 SK2・3 である。

掘立柱建物 SBI (調査時: P3-329・340・376・318・317・326・373)

(検出) 調査区北西隅で検出した。遺構検出を行った段階で、小穴が並ぶことから掘立柱建物と判断した。調査は各柱穴を長軸で半裁し覆土を記録した。(形状・規模) 検出できた範囲で梁行 2 間 × 桁行 2 間の建物と考えられる。但し北西側では梁の中央の柱穴が検出できなかったため、さらに北西側に延びると考えられる。検出できた範囲で梁行 2.8m × 桁行 3.2m で、柱穴は直径 40cm 程である。(覆土) 柱穴の覆土はおむね単層で、柱の痕跡を明瞭に残すものは認められない。(遺物) 遺物は出土していない。(時期・性格) 時期は不明であるが、周辺で出土している遺物から弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置付けられると考えられる。

風倒木痕 SX1・2

(検出) 遺構検出時に、黒褐色土の不整形な環状にめぐる溝状のプランを検出した。断ち割った結果、当初地山と認識していた覆土が黒褐色土の覆土の下に潜り込むことがわかり、木が倒れた際に地山を巻き上げたことによる風倒木痕の可能性が高いと判断した。(規模・形状) SX1 は 2.1m × 1.6m、SX2 は 6m × 4.4m の不整形なプランである。(遺物) 覆土から出土した遺物は、人為的に埋没したものではなく、倒木に巻き込まれたものと考えられる。37 は風倒木痕 SX2 から出土した弥生時代終末期頃の壺の口縁部である。(時期) 詳細な時期は不明であるが、SX2 は遺物から弥生時代後期後半以降であると考えられる。

土坑 SK2・3 (調査時: 土器溜まり 1・2)

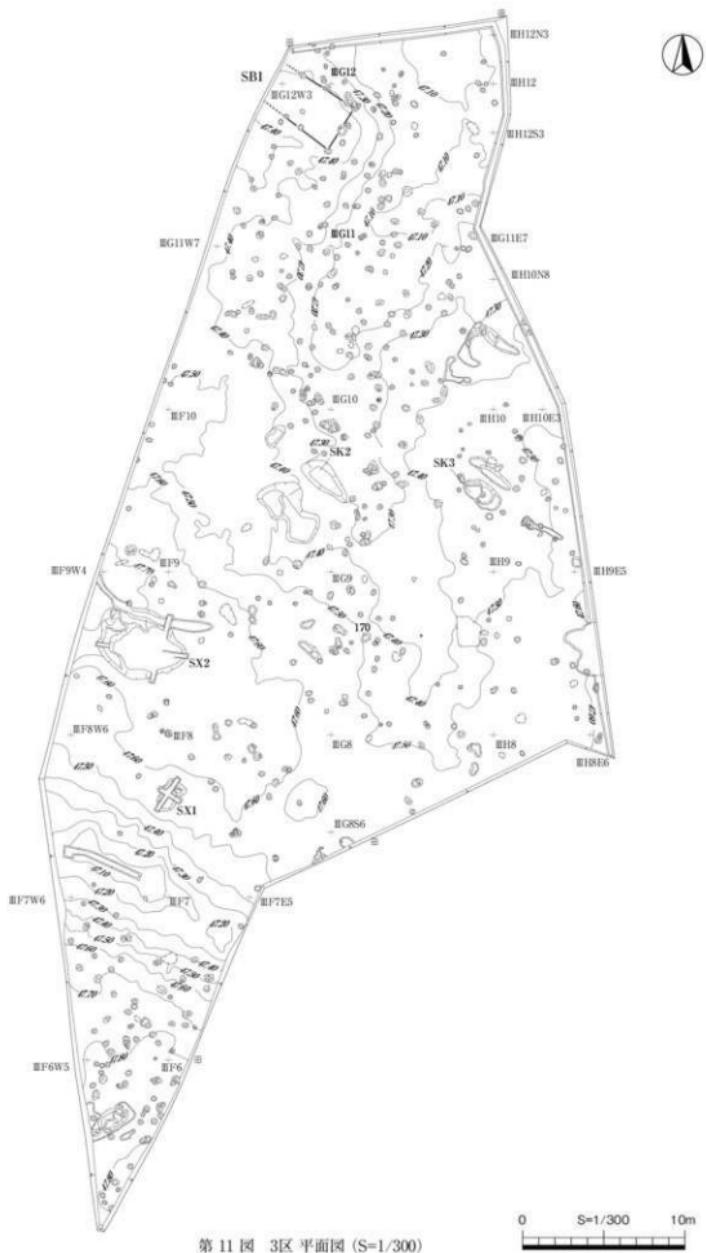
(検出) 遺構検出の際に検出した不整形な土坑である。遺物が出土したことから土器溜まりとして記録を行った。(規模・形状) SK2 は 3.2m × 1.4m、SK3 は 2.4m × 1.2m の不整形な土坑状の遺構である。(遺物) 39 から 42 は SK2 から出土した土器類で、弥生時代後期後半から終末期のものである。43 から 46 は SK3 から出土した土器類である。43 は装飾付の高杯または器台の脚部であり、内外面共に丁寧にミガキを施し、外面には 2 条の沈線が巡る。45 は弥生後期後半から終末期の壺の肩部で、外面に斜め方向のハケ目調整のち等間隔に刻み目を施している。(時期・性格) 時期はいずれも弥生時代終末期頃のものと考えられる。

第 3 項 遺物

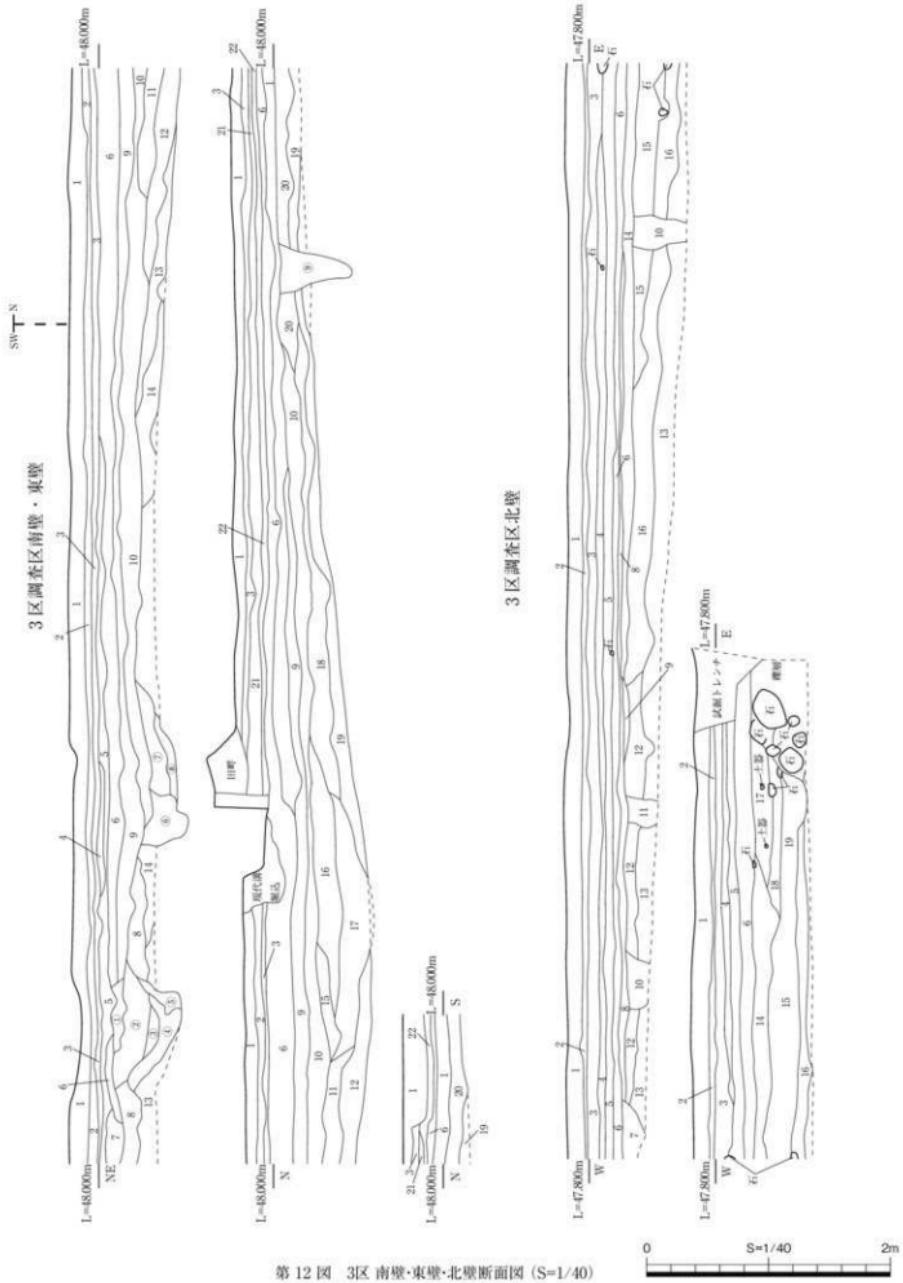
38 は小穴 PI70 から出土した、壺または鉢に取りつく把手である。このほか遺構検出時に打製石斧 1 点 (47) が出土している。

第 4 項 小結

3 区は最も広い調査区であるものの、小穴から出土した遺物は小片のみで、時期を特定できない遺構が大半である。掘立柱建物 SBI も時期の決め手に欠くものであるが、周辺で出土した遺物から弥生時代後期後半から終末期に位置付けられると想定できる。



第11図 3区平面図 (S=1/300)



第12図 3区 南壁・東壁・北壁断面図 (S=1/40)

3区調査区南壁・東壁

1. 観音土（上層）
2. 觀音土（下層）
3. 觀音土（Fe 多量沈着）
4. 3層と5層の混在層（50%～50%）
5. 5YR2-2 黒褐色シルト色（觀音土、Fe 沈着、炭化物沈着、約5mmの白礫目立つ）
6. 5YR2-2 黒オリーブ色（觀音土、Mn 多量沈着、Fe 沈着、炭化物混）
5層より多い、約5mm白礫目立たないが少し有り
7. 25Y6/2 黑褐色（約1～2cmの白礫目立つ）
8. 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土質土（φ2～5cm白色粘土ブロック土、Fe 沈着）
9. 10YR4/4 黑褐色粘土質土（Mn 多量沈着、Fe 沈着）
10. 10YR3/2 黑褐色粘土質土（Mn 沈着、炭化物沈着、Fe 沈着下に多い）
11. 7.5YR2-1 黑褐色（炭化物少量混）
12. 10YR3/2 黑褐色膠泥シルト（炭化物少量混、Mn 沈着）
13. 2.5Y3/2 黑褐色シルト（炭化物混）
14. 10YR4/2 黑褐色色膠泥（炭化物少量混、地山混、80%～20%、地面上層腐植土化。ないしは上層の堆積時に地山を削りまきこんだもの）
15. 7.5YR2/1 黑褐色
16. 7.5YR2/2 黑褐色シルト質粘土質土（炭化物少量混、Fe 微量沈着）
17. 7.5YR3/1 黑褐色シルト（炭化物少量混）

18. 7.5YR2/1 黑色シルト質粘土質土（炭化物少量混、Mn 沈着、Fe 沈着）
19. 14層と同じ
20. 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土質土（上半に Fe 沈着、Mn 微量沈着）
21. 黒耕土
22. 旧床土（ただし現代のもの）

- 遺構 ① 5層と②の混在層（50%～50%）
② 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土（Mn 微量沈着、Fe 少量沈着）
③ 10YR2/1 黑色シルト質粘土
④ ③に地山ブロック（φ 5～10 cm）が混在したもの
⑤ 2.5Y3/2 黑褐色シルト
遺構 ⑥ 10YR3/2 黑褐色シルト質粘土
(φ 1～2 cmの灰白色粘土ブロック（Fe 多量沈着）が混入する Mn 沈着)
⑦ 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土（Mn 多量沈着）
⑧ ⑦と地山の混在層（50%～50%）
遺構 ⑨ 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土質土（Mn 沈着、炭化物沈着）

3区調査区北壁

1. 観音土
2. 観音土
3. 10YR5/2 黑黃褐色粘土質土（Fe 沈着、Mn 沈着（觀音土））
4. 10YR5/2 黑黃褐色粘土質土（觀音土）
5. 10YR4/2 黑黃褐色粘土質土（Mn 沈着、Fe 多量沈着（觀音土））
6. 10YR3/2 黑褐色粘土質土（Mn 多量沈着（觀音土、土手解））
7. 10YR2/2 黑褐色粘土質土（觀音土～微細シルト土（土手解））
8. 7.5YR2/4 黑褐色粘土質土（Fe 多量沈着）
9. 10YR4/3 に於く 黑褐色 中～細砂 Mn 沈着
- 遺構 10. 10YR2/3 黑褐色シルト質粘土質土 Mn 下手に微量沈着
- 遺構 11. 10YR2/3 黑褐色シルト質粘土質土と地山の混在層 Mn 下手に微量沈着

- II 地山 12. 2.5Y3/3 黒オリーブ色 細砂 Mn 微量沈着と 10YR3/2 黑色粘シルト質粘土の混在層
(本来は地山だが、再堆積や表面の操作により、上手は廣植土化、60%～40%)

- 地山 13. 10YR4/1 黄色 中～細砂
基部最上部 14. 10YR3/3 黑褐色シルト質粘土（しまり良）Fe 多量沈着
基部解剖 15. 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土 Mn 微量沈着 Fe 微量沈着
16. 10YR3/2 黑褐色シルト質粘土（ベタつく）上半に Mn 沈着 下半は地山まきこみや黄色味強い
17. 5Y2/1 黑色シルト（土壁にじりや多い）
18. 2.5Y2/1 黑色シルト質粘土
19. 10YR4/1 黄褐色シルト質粘土 Fe 微量沈着 5～10 cmの灰色粘土ブロック塊が混入

● 4区・5区

第1項 概要

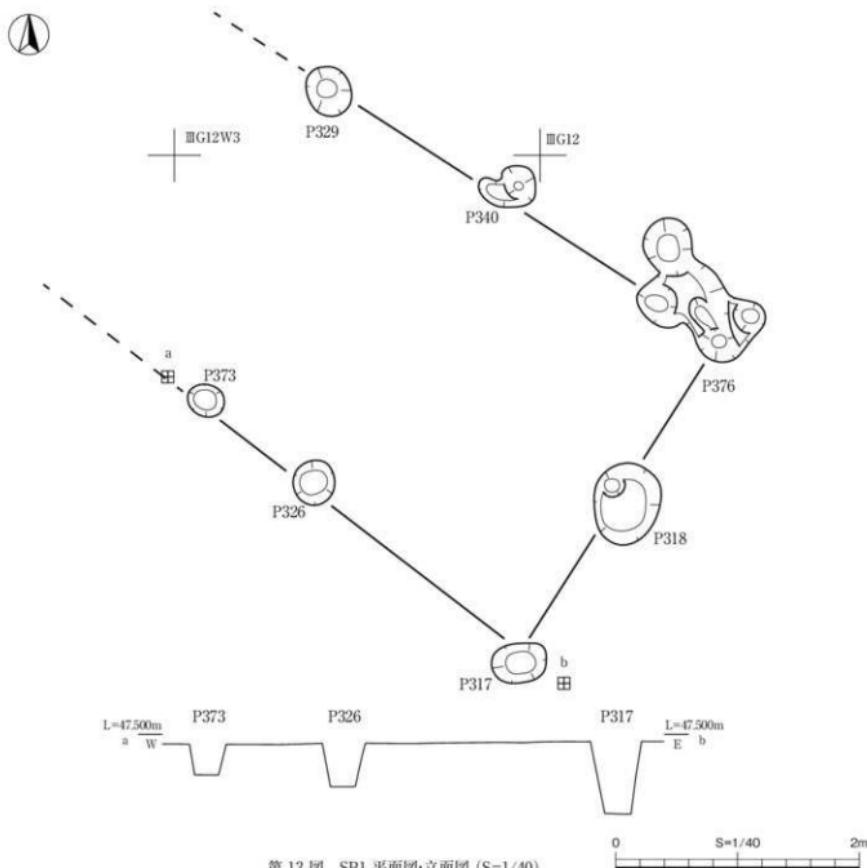
4区及び5区は平成28年度調査区の西端に位置している。4区の中央から5区の東側にかけて南北方向に延びる地形の落ち込み（鞍部）があり、4区では鞍部東側の微高地で小穴等を検出している。5区では鞍部から遺物がまとまって出土しているほか、調査区の中央で方墳1基及び溝1条、風倒木痕と考えられる不整形な溝状の遺構を複数基検出した。

第2項 遺構

検出した主な遺構は、4区の西端から5区にかけて南北に延びるSD1及び、5区で検出した方墳SZ1である。またSZ1と重なり合う風倒木痕と思われる不整形な溝を多数検出した。小穴は建物として組み合うものは確認できなかった。

溝 SD1

（検出）4区の西端及び5区の中央で検出し、現地調査の時点で一連の溝であると判断した。後述する方墳SZ1と切り合い、調査時点ではSD1が切ると判断したが、切り合いか逆である可能性がある。（形状・規模）幅1から1.6m、深さ約40cmの溝で、北西から南東方向に直線状に延びる。南北端とも調査区外に延びており、全長は不明である。断面形状は4区ではややV字に近い深い逆台形で、5区では緩やかに立ち上がる逆台形である。（覆土）黒褐色土の腐植土層と地山土の混じりで3層に分層した。流水の痕跡は確認できなかった（遺物）出土した遺物は、弥生時代終末期の壺口縁部などであり、遺物量は少ない（第15図-48～53）。（時期・性格）遺物の時期は

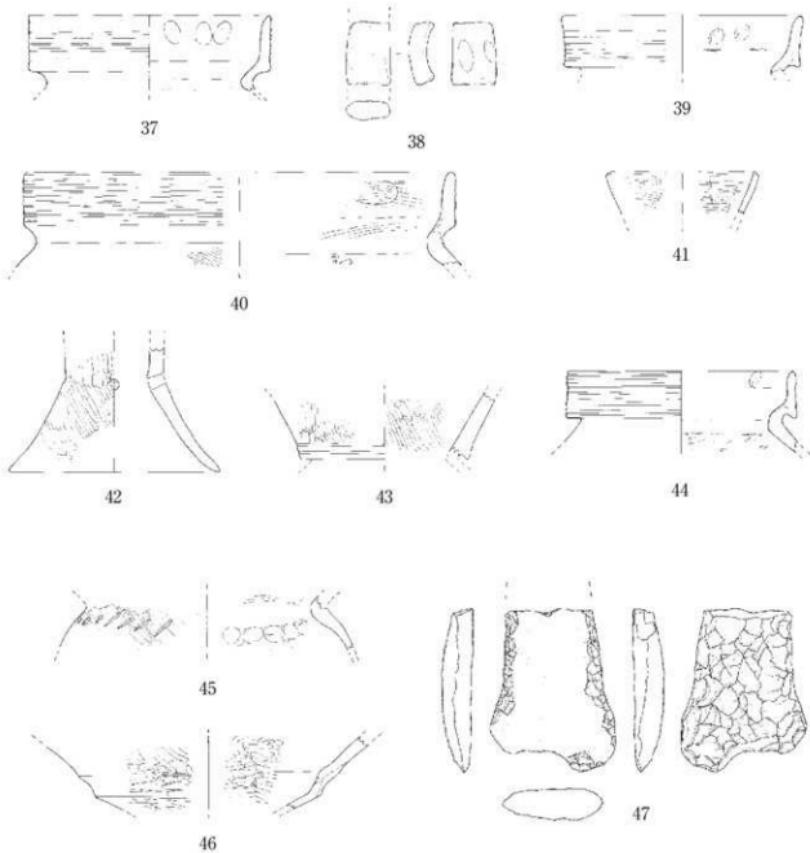


第13図 SB1 平面図・立面図 ($S=1/40$)

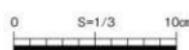
弥生時代終末期頃であり、この時期に開削された区画溝と考えることができる。ただし SD1が後述する SZ1を切っていると評価しているため、この溝が古墳時代まで下るものであるか、検出時の切り合いの評価が誤っていたものと考えられる。

方墳 SZ1 (調査時 : SD2 ~ 4)

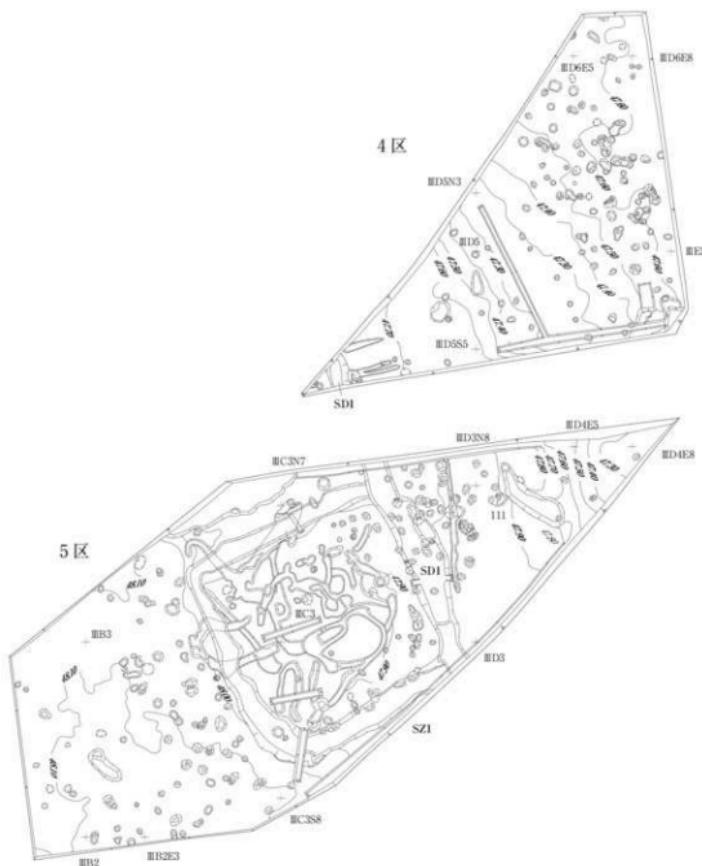
(検出) 5区の中央で検出した。現地調査の時点では、SD1と切り合う逆コの字状に巡る溝 SD2 ~ 4として調査を行った。検出時点では古墳と積極的に判断できる遺物は確認できず、また風倒木痕が錯綜していたため遺構の認識は困難であった。そのため調査時点では弥生時代終末期ごろの区画溝と考えておらず、古墳との判断には至らなかった。また4区から延びる SD1と切り合っているが、SD1とSD2 ~ 4の覆土は酷似しており、切り合いの判断は困難であった。その後、平成29年度に調査した8区で前方後方墳が検出されたことにより、このSD2 ~ 4は方墳の周溝である可能性が高いと評価を改めた。(形状・規模) 検出した遺構は古墳の周溝のみであり、墳丘



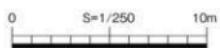
第14図 3区 遺物実測図 (S=1/3)

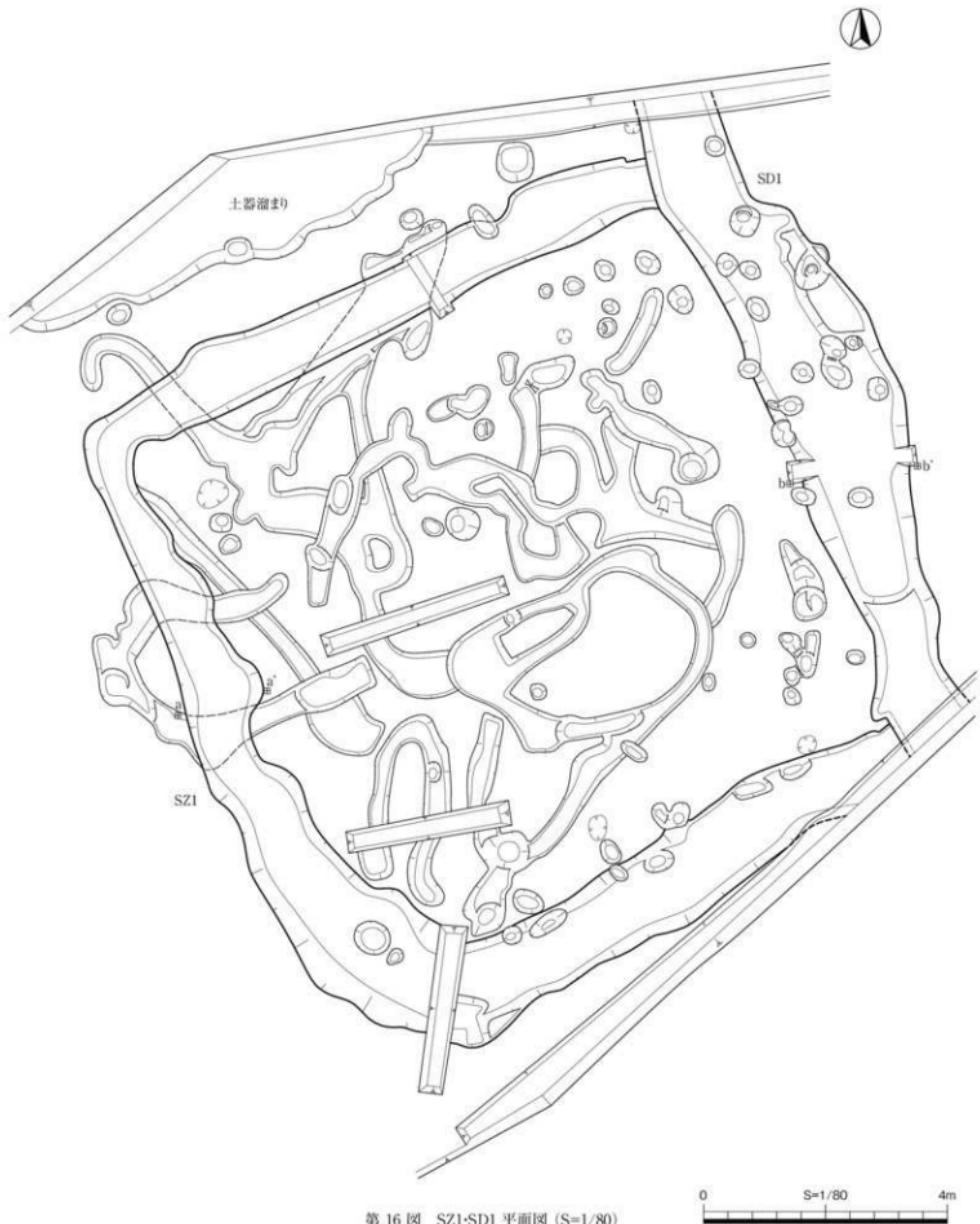


(A)

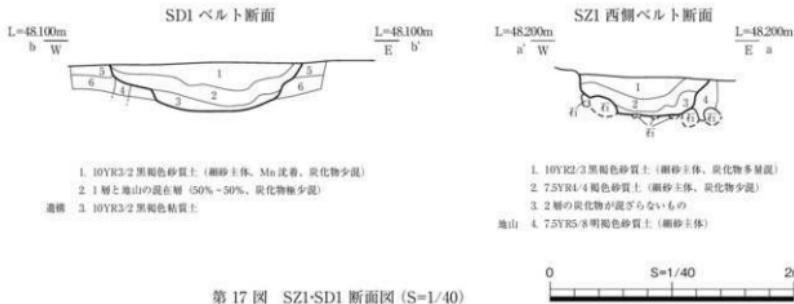


第15図 4区・5区 平面図 (S=1/250)





第 16 図 SZ1-SD1 平面図 (S=1/80)



第 17 図 SZI・SDI 断面図 (S=1/40)

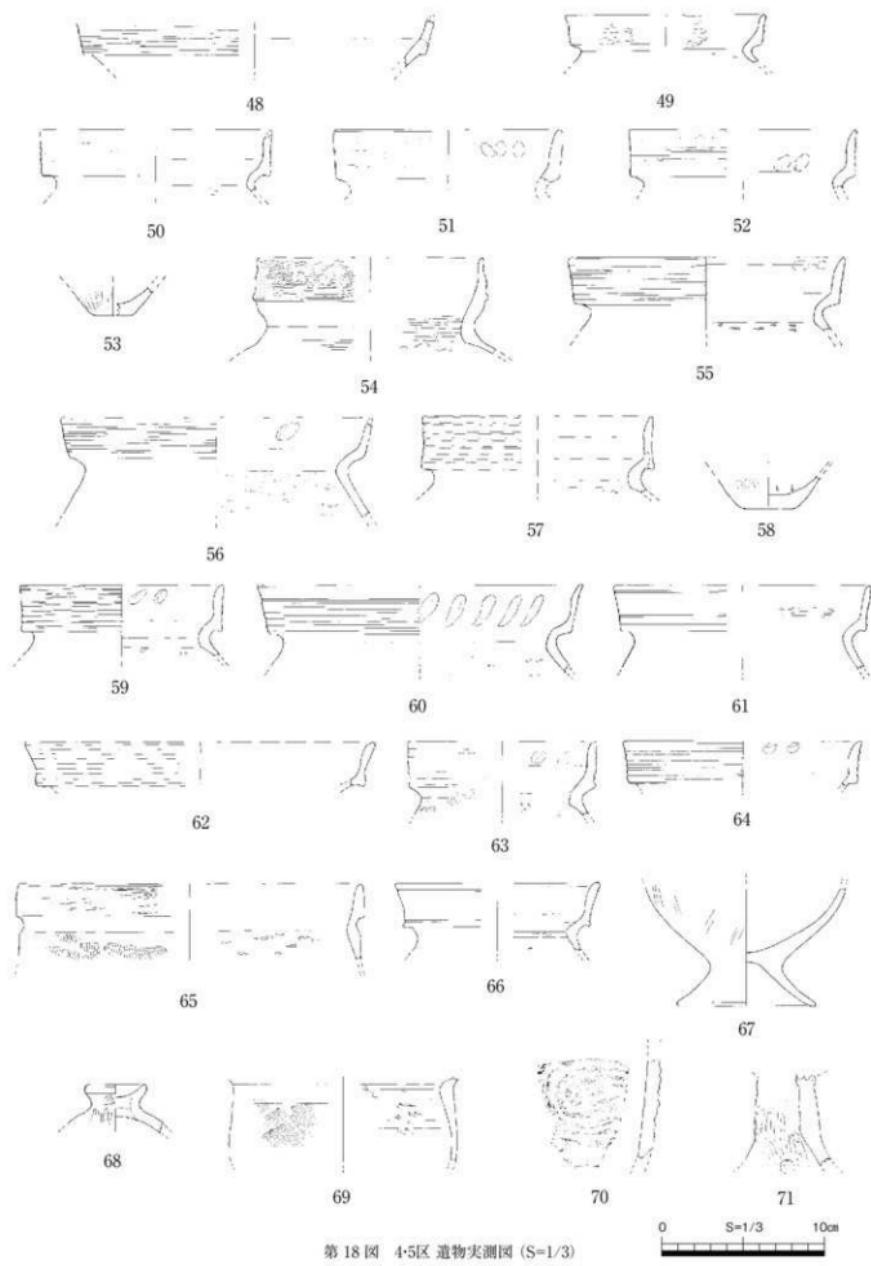
部分や埋納部は確認できなかった。溝の内部に墳丘が存在したと想定すると、一辺 9.6m ほどの墳丘であったと想定できる。周溝は幅 90 から 120cm、検出面からの深さ 30cm 程で、緩やかに立ち上がる逆台形状である。(覆土) 黒褐色土のシルト質土と、砂質の地山土が多く混じる。ブロック土の混じりは少なく、人為的に埋没された形跡はみられなかった。(遺物) 周溝から出土した遺物はごくわずかであり、実測することができたものはない。(時期・性格) 時期の決め手となる遺物に欠くため時期の判断は困難であるが、古墳時代前期初頭頃のものと考えられる。詳細は第 5 章総括で検討する。

第 3 項 遺物

調査区中央の北壁際で不整形な土坑状の土器溜まりを検出した。覆土中より弥生時代終末期の甕を中心に土器が出土している(第 18 図-55 ~ 59)。その中で 55 は口縁部の擬凹線文が波状に巡るものである。また、調査区東端で地形の落ち込み(鞍部)を検出しており、その覆土中から同時期の遺物を中心に出土している(第 18 図-60 ~ 64)。

第 4 項 小結

5 区では古墳時代前期初頭頃の方墳 1 基を検出した。方墳としては新庄地区では初めて発見されたものであり、調査前の時点では予想していなかった成果である。総括でその意義を再整理する。



第18図 4-5区 遺物実測図 (S=1/3)

● 6区・7区

第1項 概要

6区及び7区は3区の北側に位置し、平成29年度に調査を行った。前年度に調査を行った3区の北側では小穴を多数検出しており、本調査区でも小穴を検出したものの、遺構密度が希薄になる状況を確認した。

第2項 遺構

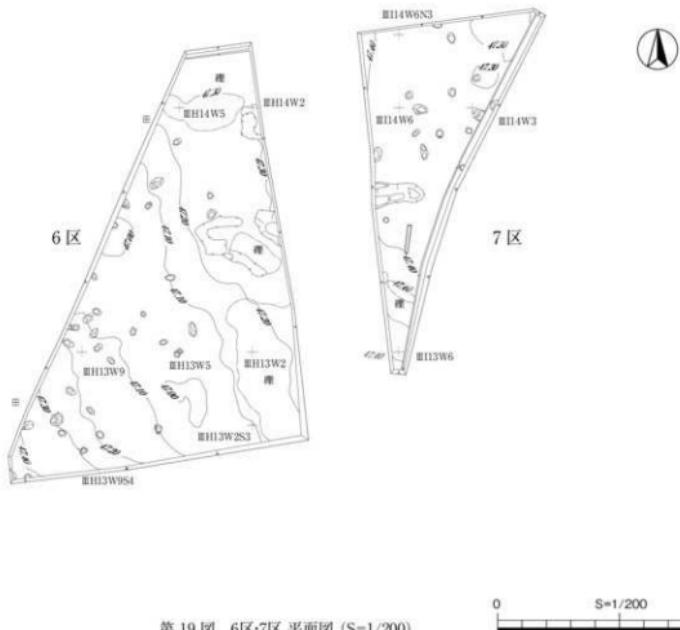
6・7区で検出した遺構は小穴の他、不整形な土坑1基を6・7区にまたがって検出した。小穴が建物などを構成するものは確認できず、また遺物も希薄であることから、ここで特記する遺構はない。また6区の中央で、3区から延びる南東から北西に方向に延びる谷筋を検出した。

第3項 遺物

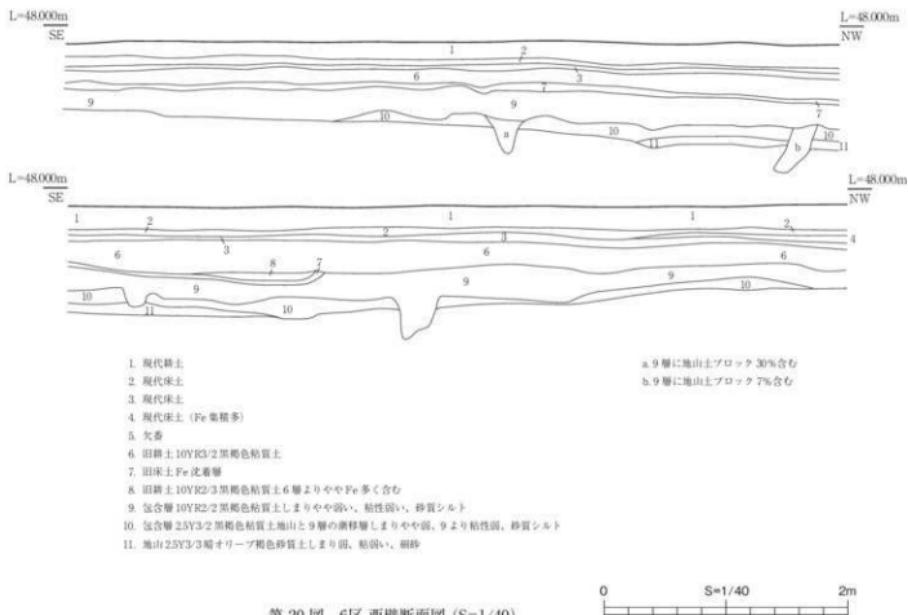
6・7区から出土した遺物はごくわずかであり、実測することができたものはない。出土した土器類はいずれも小片であるが、1から5区で出土した弥生時代後期後半から古墳時代初期頃の土器と同じ土師質のものである。

第4項 小結

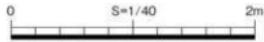
6・7区は3区から北へ延びる谷筋を検出し、その微高地上に小穴が点在する様相を確認した。遺構遺物共にまばらであり、上新庄チャンバ遺跡の北限を示すものと考えられる。



第19図 6区・7区 平面図 (S=1/200)



第 20 図 6 区 西壁断面図 (S=1/40)



● 8 区

第 1 項 概要

8 区は調査範囲の西端に位置しており、平成 29 年度に調査した。他の調査区と異なり、調査前は造成され資材置き場となっていた。第 1 章で述べたとおり、現地調査の途中で遺跡が西へ広がることを確認したため、調査途中で重機を搬入し調査区を拡張した。660m の調査を行った。

第 2 項 遺構

検出した遺構は前方後方墳 SZ2、小穴約 100 基及び近現代の自然流路である。小穴については柱が据えられた可能性がある掘込みの深いものも確認できたが、配置を検証した結果、建物を構成するものは発見できなかつた。

前方後方墳 SZ2 (調査時: SD8-1)

(検出) 8 区の重機掘削時に、調査区北西部で逆 L 字状に屈曲する溝状の遺構を検出した。ほぼ 90 度に屈曲することから、当初は人工的に掘削された区画溝と考えた。また溝北端部の調査区壁際より西に、南西側がほぼ直角となる平面三角形状のプランを検出した。これらの遺構が、調査区外に伸びると考えられたため、遺跡の範囲および調査範囲を西に拡張した。その結果、調査区北西隅で対となるプランを検出した。この時点で、この溝が前方後方墳の周溝であり平面三角形状のプランはくびれ部にあたると判断した。(覆土) 周溝の覆土はブロック土をあまり含まない単純層で、遺物もごく少量である。(形状・規模) 周溝は幅 2.8m ~ 5m、深さ 40 ~ 60cm の逆台形で、壁面は緩やかに傾斜する。周溝東側の外縁は弧状にやや膨らむが、周溝南側は膨らまず直線状に開削されている。前方後方墳は北側に前方部を持ち、墳長 18.4m 以上、前方部は幅 4m、長さ 4.4m 以上、後方部は

Ⓐ



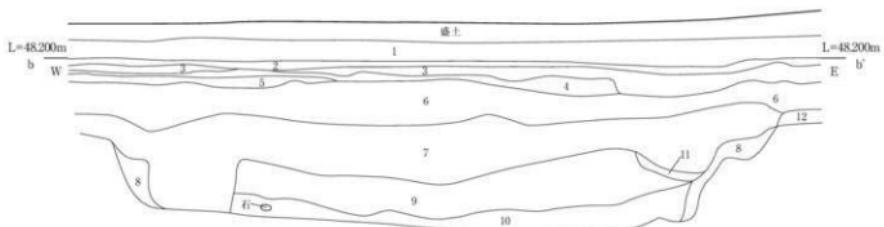
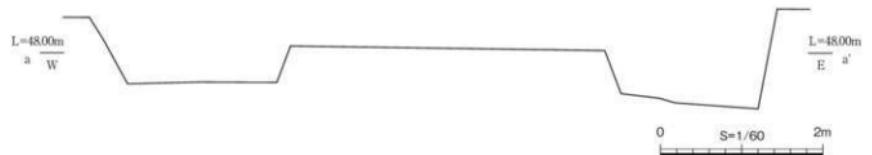
第 21 図 8区 平面図 (S=1/200)

0 S=1/200 10m



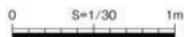
第22図 8区SZ2平面図(S=1/100)

A horizontal scale bar with tick marks every 1/100 of a meter. The label "S=1/100" is centered above the bar, and "5m" is at the right end.



- | | |
|---------------------|---|
| 1. 現耕土 | 7. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト |
| 2. 床土 | 8. 10YR3/2 嫡褐色砂質シルト |
| 3. 旧耕土 | 9. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (SZ2周溝土) |
| 4. 床土 | 10. 10YR3/3 斯褐色砂質シルト 小礫アリ (SZ2周溝土) |
| 5. 床土 (Fe沈着量) | 11. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 地山ブロックφ30mm 10%混じる |
| 6. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト | 12. 10YR5/4 にふい黄褐色砂質土 (地山) |

第23図 8区 SZ2断面図 (S=1/60・1/30)



幅約14m(復元長)、長さ14mを測る。墳丘や埋納部は削平されており検出することはできなかった。(遺物)周溝部から出土した遺物で実測できたものは打製石斧3点(72~74)のみであり、SZ1と同じく時期を特定する遺物に欠く。(時期・性格)前方後方墳の周溝と評価した。時期を特定する遺物に欠くが、古墳時代前期初頭頃と考えられる。総括で時期を検討したい。

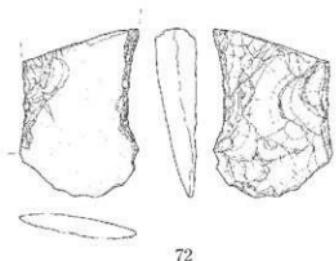
第3項 遺物

8区で出土した遺物で実測することができたものは打製石斧のみである。このほか、小穴から土器の小片が出土するものがあるものの時期を特定できるものではなく、古墳との前後関係も明確ではない。

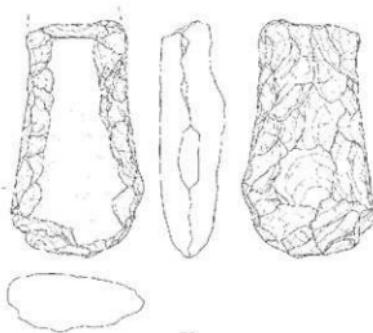
第4項 小結

8区では前方後方墳1基を検出した。8区の調査時に、県道を挟み8区の西側で遺跡の範囲確認調査を行ったが、遺構遺物ともに確認できなかった。またこの範囲確認調査によって地形が東から西に急激に落ち込むことが確認できたことから、この古墳は微高地の西端に立地していることがわかった。

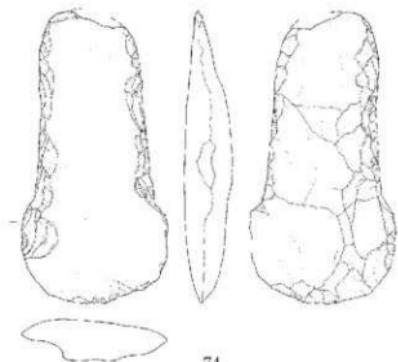
この古墳も5区の方墳SZ1と同じく、時代を絞り込む遺物に乏しく、周辺で古墳の発見例がないことから、調査時に古墳の可能性を想定しつつも確証に足る根拠を得られず、十分な記録を取ることができなかつた。ひとえに調査員の力量不足であり大いに反省するものである。



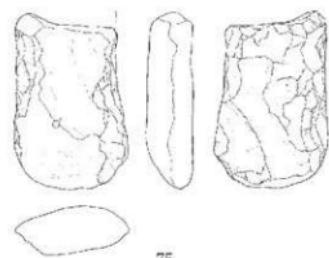
72



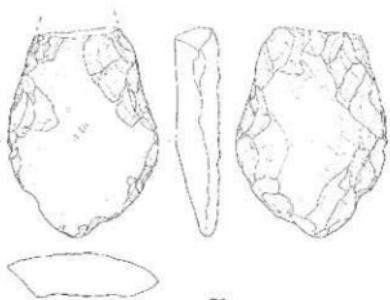
73



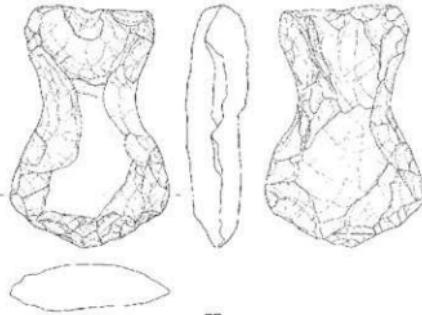
74



75

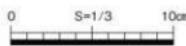


76



77

第24図 8区 遺物実測図 (S=1/3)



第4章 総括

第1節 平安時代の様相について

上新庄チャンバチ遺跡は道路整備に伴い新規に発見された遺跡である。調査以前は弥生時代終末期の集落の存在が予想されていたが、これに加え古墳の発見及び9世紀代の堅穴建物の発見という成果があった。このうち古墳については次項で述べるとして、堅穴建物SIIについて再度その意義について述べる。

上新庄チャンバチ遺跡でこの堅穴建物のほかに9世紀代に比定される遺構は発見されておらず、南側に位置する熱野遺跡との関係性の中で考えることが妥当である。熱野遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭、平安時代の堅穴建物および掘立柱建物が検出されている。そのうち平安時代の遺構は、堅穴建物と掘立柱建物と概ねセットとなり、切りあいによって3時期に区分されている。出土した遺物から概ね8世紀の後半から9世紀の初頭以降のものと考えられ、報告者は平安時代の開発拠点集落と評価している（小阪2015）。

上新庄チャンバチ遺跡では掘立柱建物は発見できなかつたが、堅穴建物が調査区の端で発見されており、調査区外に対となる掘立柱建物が存在することも考えられる。上新庄チャンバチ遺跡は熱野遺跡を中心とする平安時代の集落の縁辺部と評価できよう。

第2節 新規に発見された古墳について

上新庄チャンバチ遺跡で発見された方墳SZ1と前方後方墳SZ2について、御経塚シンデン古墳群などを比較対象として挙げ検討する。編年は漆町編年（田嶋1986）を基本とし、各遺跡の報告者の年代観を採用する。

御経塚シンデン古墳群は15基の古墳が確認されている。その内訳は前方後方墳が4基、方墳が11基である。最も大きいものは墳丘部で全長26.5mのST01であり、次いで全長20.2mのST14がある。本遺跡のSZ2は全長18.4m以上でありST01より小さく、ST14とはほぼ同じ規模である。またST01とST05、ST14とST04など2基が一对となって古墳群を構成している。土器群の検討を行った横山貴広氏は、古墳群の時期を漆町編年の6群の後半から8群（古墳時代前期初頭から前期前葉後半）にかけてとしている（吉田・横山2001）。

また横江古屋敷遺跡でも、御経塚シンデン古墳群とほぼ同時期の方墳SX401と前方後方墳SX402が2基並ぶ形で発見されている（金山1995）。

この古墳が2基一对となる構成は、弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓が発見されたことで著名な旭遺跡群でも確認されている。旭遺跡群の墓域構成の変化について検討した前田清彦氏は、弥生時代終末期から古墳時代初頭（月影式新相～白江式）に、大きな区画墓を核とした列状連接から2基一对が連接するパターンへと変化するとしている（前田1995）。上新庄チャンバチ遺跡で発見されたSZ1とSZ2についても、若干距離が開くものの2基一对として築かれたものと考えられる。

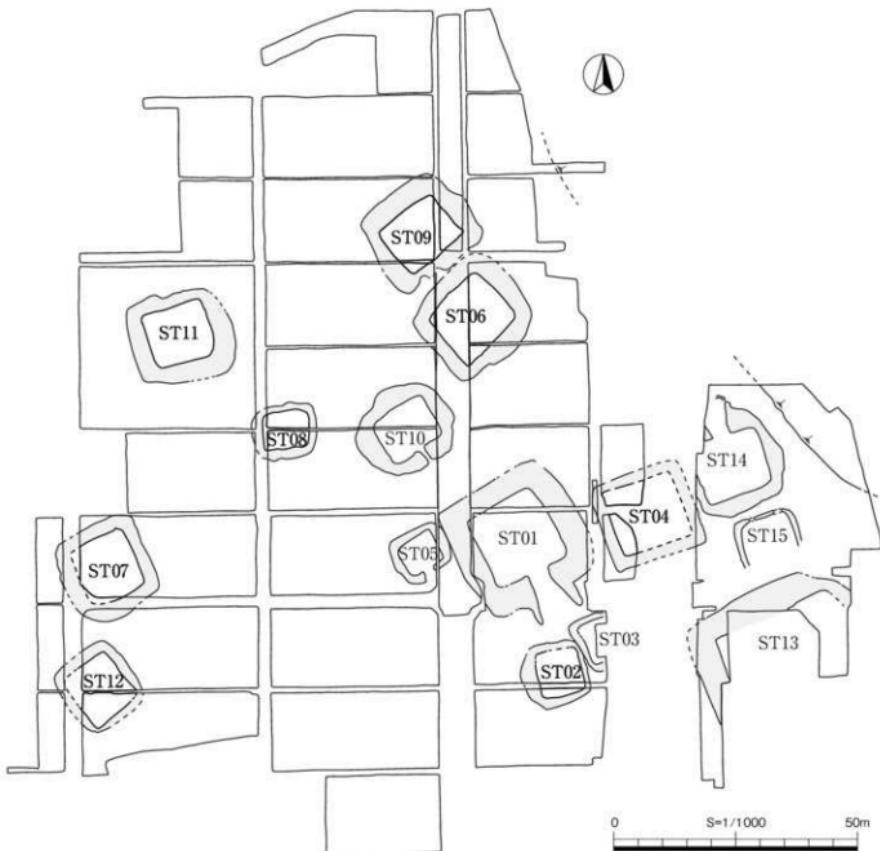
また、伊藤雅文氏は北陸の古墳を中心に検討する中で、前方後方墳が古墳時代前期初頭（白江式期）に作られ始め、前期前葉後半（古府クルビ式期）頃を画期に、全長20m前後のものから50mを超える大型化の傾向がみられるることを述べている（伊藤2008）。上新庄チャンバチ遺跡のSZ2の全長が見つかっている範囲で18.4mであることから、大型化する前のものと考えられる。

これらのことから、遺物に乏しく時期を絞り込むことはできないものの、SZ1とSZ2は概ね古墳時代前期初頭頃に築かれたものと考えられる。熱野遺跡で同時期の堅穴建物が見つかっていることから、集落域（熱野遺跡）と墓域（上新庄チャンバチ遺跡）がセットとなることが明らかになった。

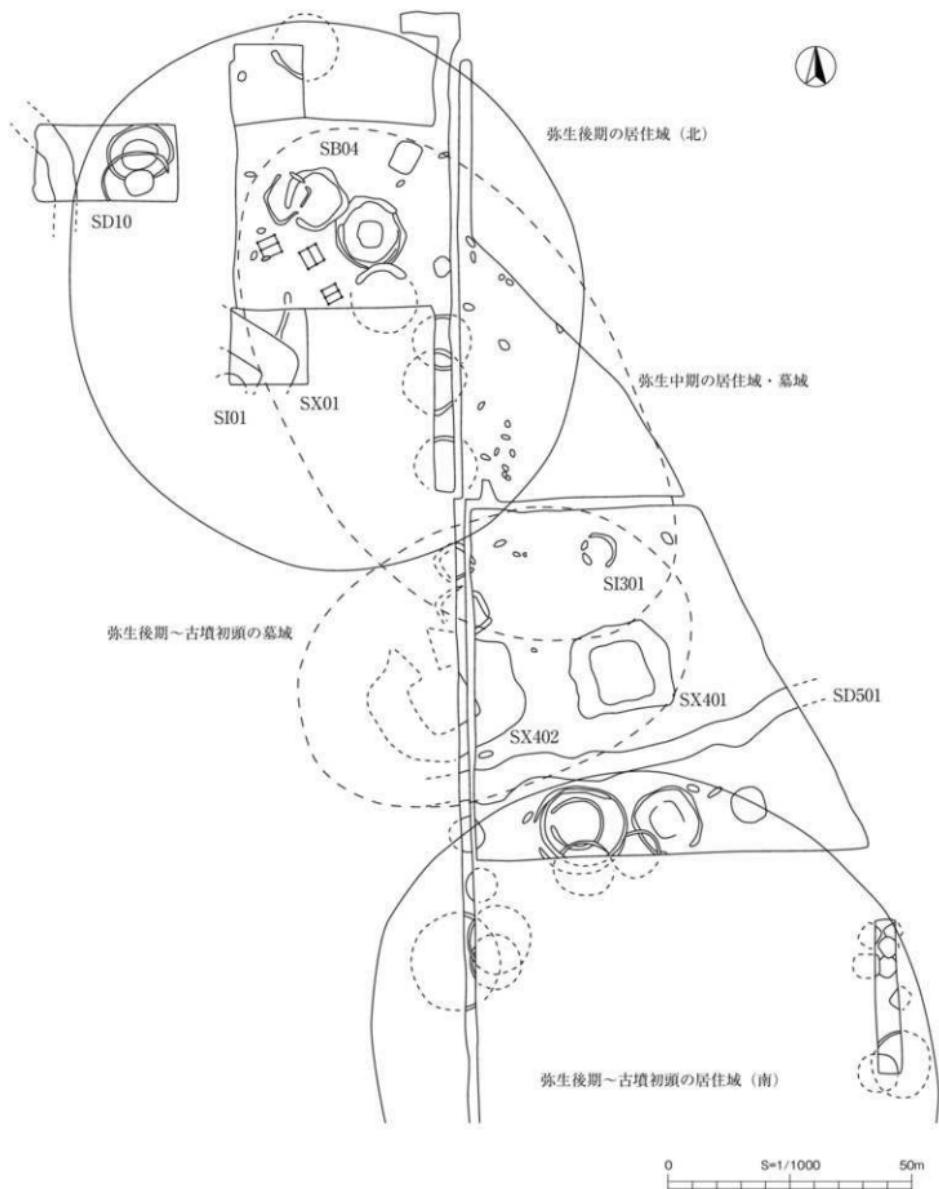
今回の古墳の発見は、7世紀前半まで「政治的・経済的に流動的な空白地域」（吉岡2009）と考えられてきた手取川扇状地における、弥生時代終末期から古墳時代の様相を再検討する契機となるものと評価できる。

（参考文献）

- 伊藤雅文、2008『古墳時代の王権と地域社会』学生社。
- 岩瀬由美、2016『金沢市・野々市市 下新庄フルナワシロ遺跡』二級河川高橋川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター。
- 船野義夫、1997『石川県地質誌』石川県。
- 金山弘明、1995『松任市横江古屋敷遺跡Ⅱ』新横江産業団地造成事業（濃飛西濃運輸地区）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書、松任市教育委員会。
- 小阪 大、2015『白山市曾谷遺跡・熱野遺跡』白山市曾谷町土地区画整理事業（陽羽里団地）造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、白山市教育委員会。
- 高橋由知、1999『松任市横江古屋敷遺跡Ⅳ』工場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、松任市教育委員会。
- 田嶋明人、1986『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター。
- 前田清彦、1995『旭遺跡群』松任市教育委員会。
- 前田清彦、1997『横江古屋敷遺跡Ⅲ』倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、松任市教育委員会。
- 吉岡康暢、2009『末松庵寺をめぐる問題』『史跡末松庵寺跡』文化庁。
- 吉田淳・横山貴広、2001『御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群』御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ、野々市町教育委員会。



第25図 御経塚シンテン古墳群分布図（吉田・横山2001を再トレース・加工）



第 26 図 横江古墳敷遺跡の展開 (高橋1999を再トレース・加工)

第1表 土器観察表 ()は推定値

報告番号	調査区	出土位置	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	調整(外)		色調(外)	残存率	備考	実測番号
							調整(内)	色調(内)				
1	I区	P77	縄文土器 深鉢	154			口徑押圧 摩擦	浅黄橙 浅黄橙	口徑約1/18	外側表面部分剥離あり	Ku21	
2	I区	P11	土師器 壺	136			ハケ、指頭圧痕、ミガキ ハケ、コナネ、指頭圧痕	浅黄橙 浅黄橙	口徑約1/9			Ku12
3	I区	P12	土師器 壺	208			ナデ、ハケ ナデ、ハケ	にい・橙 橙	口徑約1/12			Ku10
4	II区	SI1土器4	須恵器 环身	126	41	84	回転ロクロナナデ	灰		完形		Ka3
5	II区	SI1土器5	土師器 小型壺	134	130	頭部径 120	回転ロクロナナデ、スピナナデ ナデ、ハケ	灰 橙	口徑1/3	体部径137mm	N7	
6	II区	SI1土器6	土師器 長胴壺		頭部径 216	体部径 216	ナデ、ハケ、指頭圧痕 ナデ、ハケ、指頭圧痕	黄橙 黄橙	体部約2/5	カマドから出土	N23	
7	II区	SI1土器7	土師器 壺	256	残存高 86		ほぼ摩滅一部にカキメ残 カキメ	浅黄橙 浅黄橙	口徑約1/6	カマドから出土	Ku1	
8	II区	SI1土器3	土師器 壺	132	(58)	頭部径 126	ナデ、指頭圧痕 ナデ、摩滅大不眞	黄橙 橙	口徑1/4		N4	
9	II区	P30	弥生土器 壺	134			ナデ、擬凹縫8条、ミガキ ナデ	にい・橙 にい・橙	頭部径1/7 口徑小片		Ka28	
10	II区	P45	土師器 小型壺	120			ナデ、ハケ ナデ、ケズリ	灰黄褐 にい・黄橙	頭部径約1/7 口徑小片		Ka33	
11	II区	SK1	弥生土器	(150)			キザミ、柔軟 ナデ、無文	にい・褐 にい・橙	口徑約1/18		Ku53	
12	II区	SK1	弥生土器 壺	(168)			ナデ、赤彩か ナデ	浅黄橙 にい・橙	口徑約1/12		Ka42	
13	II区	SK1	土師器 高环	274			ナデ、ミガキ ナデ、ミガキ	にい・橙 橙			Ka66	
14	II区	SK1	弥生土器 壺	122			ナデ、ミガキ、ケズリ ナデ、ミガキ、ケズリ	にい・橙 橙	頭部径1/4 口徑小片		Ka24	
15	II区	近代溝	縄文土器				キサミ キサミ、無文	灰褐 にい・黄橙	小片	煤付着	N69	
16	II区	近代溝	縄文土器				沈縄文 無文(施文なし)	浅黄橙 にい・黄橙		小片	Ka58	
17	II区	近代溝	弥生土器 壺	140	頭部径 116		擬凹縫10条 ケズリ	にい・黄橙 にい・黄橙	口徑約1/9		O54	
18	II区	近代溝	弥生土器 壺	(162)	頭部径 126		擬凹縫8条、ナデ ナデ、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	頭部角の径1/12	頭部角の径(約148mm) 内面に指で強く押して引いた痕	O55	
19	II区	近代溝	弥生土器 壺	144	頭部径 106		擬凹縫8条 指頭圧痕、ケズリ	浅黄橙 にい・黄橙	口徑1/9		O56	
20	II区	近代溝	弥生土器 壺	46	18		ハケ ナデ	にい・黄橙 にい・黄橙	底径1/2		O61	
21	II区	近代溝	須恵器 环身	136	22	86	ロクロナデ ロクロナデ、回転ナデ	灰白 灰白	口徑約1/3 底径全周		Ka57	
22	II区	近代溝	土師器 碗			66	ナデ、摩滅大 ナデ	橙 橙	底部1/5		Ku62	
23	II区	近代溝	土師器 碗			70	ナデ、摩滅大 ナデ、摩滅大	にい・黄橙 にい・黄橙	底部1/6		Ku59	
24	II区	近代溝	土師器 高杯か 有孔鉢	(68)			ナデ、擬凹縫5条 ナデ	浅黄橙 浅黄橙	小片		Ku63	
25	II区	近代溝	土師器 碗	16			ハケ ナデ、ケズリ	明褐 橙	底部全周		N64	
26	II区	近代溝	土師器 碗		頭部径 58		ナデ ナデ	浅黄橙 浅黄橙	底部1/6	内面黑色	O68	
27	II区	近代溝	土師器 長頸壺	68			ミガキ ナデ	明黄褐 明黄褐	口緣部1/6		N70	
28	II区	近代溝	陶器 碗			42		黄灰 灰白	底径11/36	底部に移付着、削り出し高台 内面と外面に砂目	O67	
29	II区	近代溝	磁器 染付壺	140	28	82		明黄灰 灰白	口徑1/4	断面に漆黒が痕	N47	
33	II区	重機掘削	縄文土器 浅鉢か				沈縄文 無文、ナデ	にい・黄橙 にい・黄橙	小片		Ka51	
34	II区	重機掘削	縄文土器 深鉢	(138)			キザミ(口部)、柔軟 ナデ	にい・黄橙 にい・黄橙	口徑約1/9		Ka52	

報告番号	調査区	出土位置	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考	実測 番号
							調整(内)					
35	2区	重機掘削	弥生土器 甕	(148)			擬凹線1条、一部摩耗、ナデ ナデ、ケズリ	にぶい橙	口徑約1/12			Ka27
36	2区	重機掘削	弥生土器 甕口縁	(160)			ナデ	浅黄橙	頭部径1/9 口徑小片			Ka26
37	3区	SX2	弥生土器 甕	148			擬凹線1条、ナデ 指頭圧痕、ナデ、ケズリ	にぶい橙	口頭部径1/36 口縁部小片	外面煤付着		N71
38	3区	P170	弥生土器 把手付壺				ナデ	橙、赤		小片		N72
39	3区	SK2	弥生土器 甕	(146)			擬凹線5条、ナデ 指頭圧痕、ナデ、ケズリ	浅黄橙 黃橙	口頭部L/9	内部付着物あり 内部外面煤付着		N44
40	3区	SK2	弥生土器 甕	268			擬凹線6条、一部摩耗、ナデ ハケ、ナデ、指頭圧痕、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	口徑1/12			N40
41	3区	SK2	土師器 壺か	(124)			ミガキ	明赤褐		小片	外面調離している所あり 内部内壁	N45
42	3区	SK2	土師器 高环		擬凹線 130	脣部径 60	ミガキ	明赤褐	脣部径1/4 底径小片	透穴2ヶ所		N43
43	3区	SK3	弥生土器 製錬付器台				ナデ	にぶい橙				N31
44	3区	SK3	弥生土器 甕	138	脣部径 124		沈綱2本、ミガキ ミガキ	明褐 黃橙	頭部L/6 口徑L/9	口頭部外面煤付着		N29
45	3区	SK3	土師器 甕				ハケ、連続刺突文 ハケ、ナデ、指頭圧痕、ケズリ	浅黄橙 黃橙	頭部L/6	肩部に連続刺突文		N30
46	3区	SK3	弥生土器 高环				ミガキ、ケズリ、ナデ	にぶい橙 橙	環部L/12			N32
48	4区	SD1	弥生土器 甕		脣部径 (210)		擬凹線6条	灰黄褐				O48
49	4区	SD1	弥生土器 甕	(124)	脣部径 118		ナデ、ミガキ ミガキ	にぶい橙 にぶい橙	口縁部L/9 口脣部小片			O49
50	5区	SD1	弥生土器 甕		脣部径 (140)		擬凹線7条、ナデ ナデ、ケズリ	浅黄橙 黃橙	頭部L/9	頭部外面煤付着		N38
51	5区	SD1	弥生土器 甕	(138)			擬凹線	浅黄橙	口徑1/12			N39
52	5区	SD1	弥生土器 甕	(138)			ナデ、指頭圧痕 擬凹線1条、一部摩耗、ナデ	灰白 浅黄橙	口徑1/12			N40
53	5区	SD1	弥生土器 甕			24	ナデ	にぶい黄褐	底径約1/2			N41
54	5区	P111	土師器 壺	(140)			擬凹線 ナデ、ミガキ、ケズリ	にぶい橙	口徑L/9	擬凹線文が液状に延る		Ka11
55	5区	土器縁⑨	弥生土器 甕	168	脣部径 143		一部摩耗、擬凹線3条、ナデ ナデ、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	口徑約1/7			N16
56	5区	土器縁⑨	弥生土器 甕	190	脣部径 162		一部摩耗、擬凹線6条、ナデ ナデ、指頭圧痕、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	頭部約1/6 口脣部小片			N18
57	5区	土器縁⑨	弥生土器 甕	(140)	頭部径 (128)		一部摩耗、擬凹線5条、ナデ ナデ、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	頭部L/12 口頭部小片			N19
58	5区	土器縁⑨	弥生土器 甕			30	ナデ	にぶい黄褐	底径L/6			N15
59	5区	土器縁⑨	弥生土器 甕	124	脣部径 108		一部摩耗、擬凹線5条、ナデ ナデ、指頭圧痕、ケズリ	浅黄橙 にぶい黄褐	口徑約1/5			N17
60	5区	鞍部	弥生土器 甕	202			ナデ、ハケ ヨコナデ	浅黄橙 浅黄橙	口徑約1/5	外面に煤付着、指頭圧痕		Ku6
61	5区	鞍部	弥生土器 甕	158			ナデ、擬凹線3条 ナデ、ハケ	にぶい橙 浅黄橙	口頭部約1/5			Ku22
62	5区	鞍部	土師器 甕				ナデ、ハケ ヨコナデ	にぶい黄褐 浅黄橙	口徑約1/18			Ku8
63	5区	鞍部	土師器 甕		脣部径 (104)		擬凹線1条、ナデ、ハケ ナデ、指頭圧痕、ケズリ	浅黄橙 浅黄橙	頭部径1/12 口縁部小片			O34
64	5区	鞍部	土師器 甕	146			擬凹線6条	浅黄橙	口徑約2/9			O36
65	5区	遺構検出	弥生土器 甕	(212)			ハケ ナデ、ケズリ	橙 橙	口徑L/9			Ka13
66	5区	東鞍部	弥生土器 甕		脣部径 116		ナデ、沈縫4本 ナデ	にぶい橙 にぶい黄褐	頭部径L/12 口脣部小片			O37

報告番号	調査区	出土位置	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考	実測番号
							調整(内)				
67	5区	東鞍部	土師器 台付鉢	頭部径 44	86	摩減	浅黄橙	底径約2/3			Ka2
			土師器			ナデ	橙				
68	5区	東鞍部	蓋形土器	つまみ筋 38	頭部径 30	ヘラナデ、ヘラミガキ	浅黄橙	つまみ筋5・6 頭部約5・6			Ka9
			土師器			ナデ	灰白				
69	5区	東鞍部	土師器	頭部径 (136)		ナデ、ハケ	浅黄橙	頭部約1/12			O35
			土師器			ケズリ	橙、灰黄褐				
70	5区	遺構検出	繩文土器			沈縞文、縄文が若干残る	にい・黄橙	小片			Ka50
			無文、ナデ			にい・黄橙					
71	5区	遺構検出	土師器 高环	脚部径 40		ミガキ、ナデ	にい・橙	脚部全周	透穴2ヶ所		Ka5
			ナデ			にい・橙					

第2表 石製品観察表

報告番号	調査区	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考	実測番号
30	2区	近代溝	砾石	70	32	20	547			Ku65
47	3区	遺構検出	打製石斧	101	78	20	185	凝灰岩	上部欠損	N73
72	8区	SZ2	打製石斧	104	73	26	186	砂岩	上部欠損	2
73	8区	SZ2	打製石斧	146.5	82	40.5	570	凝灰岩	上部欠損	3
74	8区	SZ2	打製石斧	179	90	30	491	緑色岩	上部欠損	4
75	8区	遺構検出	打製石斧	109	71	30	322	砂岩	上部欠損	1
76	8区	遺構検出	打製石斧	129.5	94.5	28	399	石英安山岩	上部欠損	5
77	8区	遺構検出	打製石斧	150	99	39	570	凝灰岩	完形	6

第3表 木製品観察表

報告番号	調査区	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	備考	実測番号
31	2区	近代溝	刷毛	96	78	6	板目、穿孔2ヶ所	N74
32	2区	近代溝	下駄	240	89	33	板目、重量250g	Ku75

報告書抄録

ふりがな	かみしんじょうちゃんばちいせき						
書名	上新庄チャンバチ遺跡						
副書名	四十万安養寺線外1路線整備に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	巖地 孝大						
編集機関	野々市市教育委員会						
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Tel: 076-227-6122						
発行機関	野々市市教育委員会						
発行年月日	西暦 2020年3月23日						
プリガナ 所収遺跡名	プリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²
		市町村	遺跡番号				
カミシンジョウ 上新庄 チャンバチ遺跡	イシカワケン シノイチシ 石川県野々市市 シジョウニシヨウワ 新庄二丁目	17344	1208100	36° 49' 61"	136° 61' 19"	第1次 2016年5月16日～8月31日 第2次 2017年5月15日～10月4日	3,600
							発掘原因 記録保存 調査
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
集落 その他の墓	縄文・弥生・ 古墳・古代・ 近世	前方後方墳1、方墳1、 竪穴建物1、掘立柱建物1、 土坑3、自然流路、ビット	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、打製石斧、 近世陶磁器、木製品	手取川扇状地 扇央部で初めて 前方後方墳を検出			
要約	<p>都市計画道路整備に伴う分布調査で新規に発見された遺跡である。古い時期の遺物では縄文時代後晩期から弥生時代初頭の土器片が出土しているが、まとまった量が出土しているのは弥生時代後期後半から古墳時代初頭である。</p> <p>特に、前方後方墳1基と方墳1基を検出した。これらの古墳は古墳時代前期初頭頃と考えられるもので、この時期としては手取川扇状地の扇央部で他に例のないものである。</p> <p>竪穴建物は9世紀頃に位置付けられるが、このほかに当該期に属する遺構は確認できなかった。近接する熱野遺跡と共に古代の集落を形成したものと評価できる。</p>						

2020年3月23日 発行

四十万安養寺線外1路線整備に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

『上新庄チャンバチ遺跡』

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県野々市市太平寺四丁目60
有限会社アサヒヤ印刷



平成28年度調査区航空写真（西から）



平成28年度調査区航空写真（北から）



5区 SZ1・SD1 (東から)



5区 SZ1上空写真



平成29年度 6・7区 航空写真(北東から)



平成29年度 8区 航空写真(北東から)



1区 全景 (南西から)



2区 全景 (南東から)



2区 SI1 全景 (東から)



2区 SK1 (東から)



3区 北側全景



3区 SB1 (西から)



3区 SX1 (北東から)



3区 SX2 (北西から)



3区 SK2 (北から)



3区 SK3 (北西から)



3区 南壁 (南西から)



3区 北壁 (南西から)



4区 全景 (北東から)



4区 SD1完掘 (北東から)



5区 SD1断面 (北から)



5区 SZ1周溝断面 (南から)



5区 土器溜まり（西から）



6区・7区 全景（北から）



6区 西壁断面（南東から）



8区 SZ2検出（北から）



8区 全景（北から）



8区 SZ2断面（南東から）

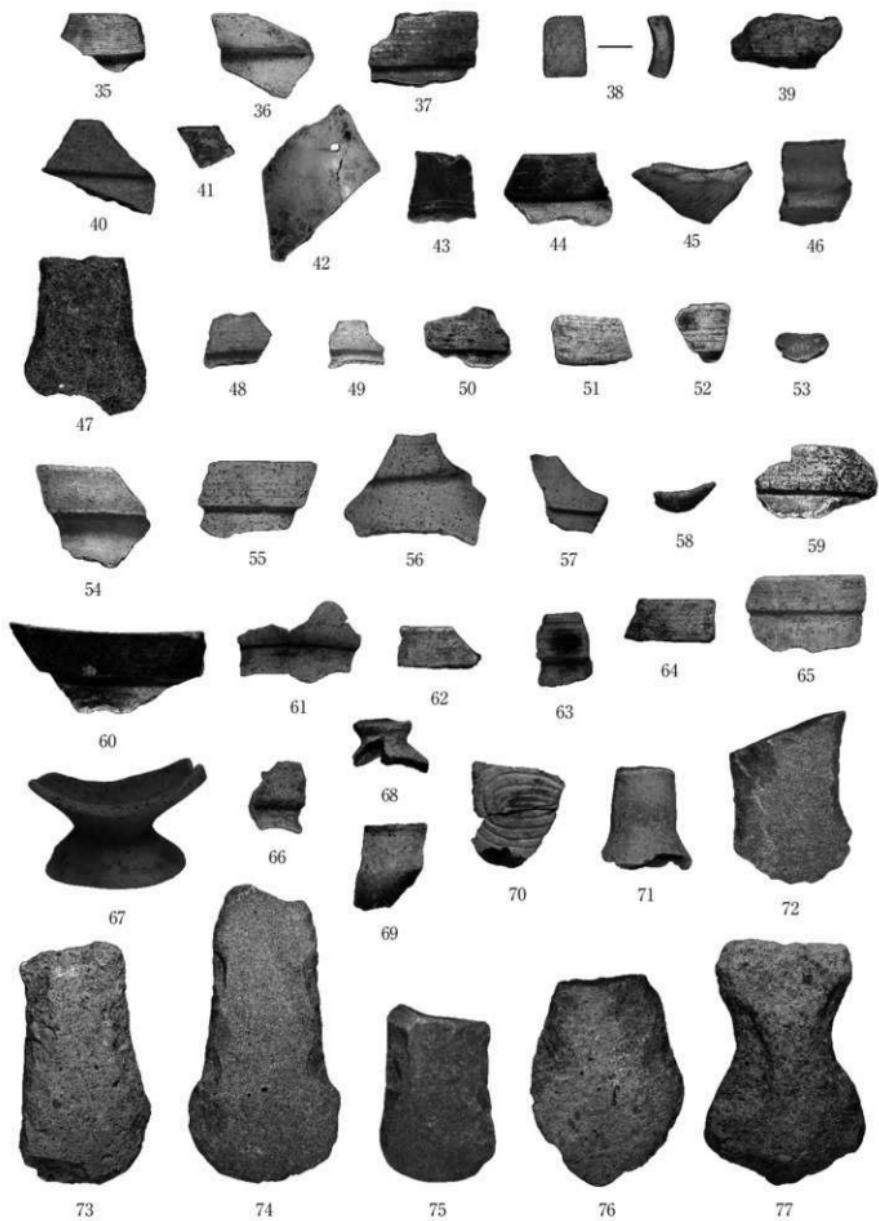


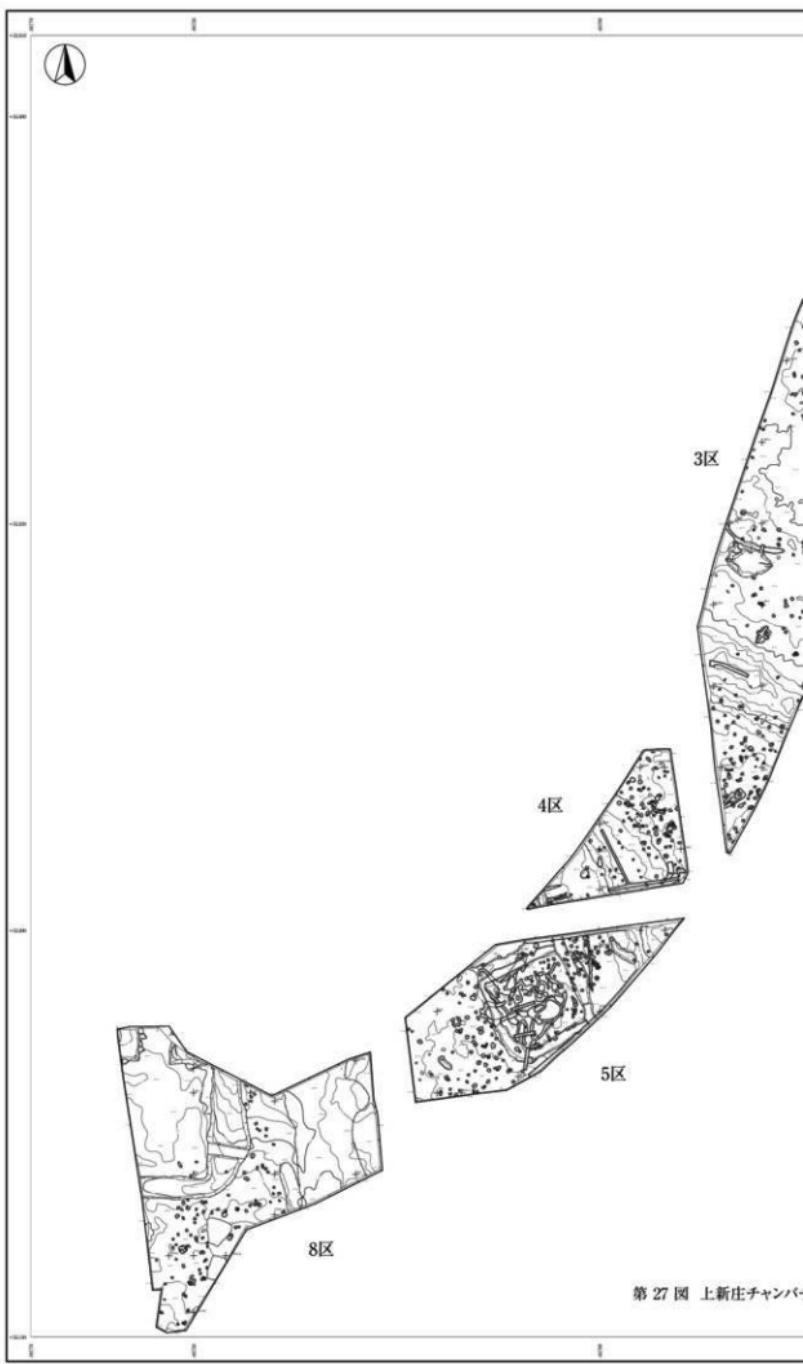
調査前風景（東から）



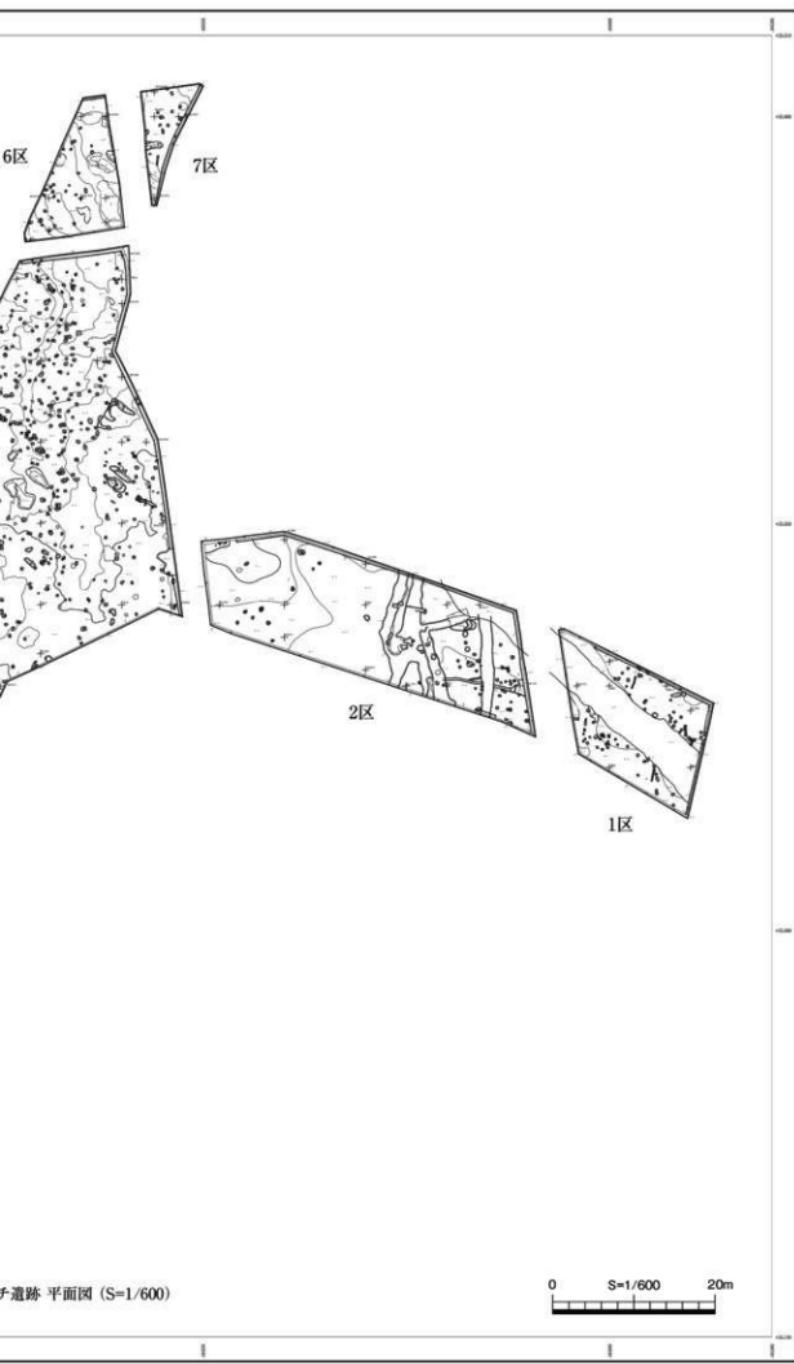
道路完成後風景（東から）







第27図 上新庄チャンバ



遗迹 平面図 (S=1/600)